香川県埋蔵文化財調査年報

昭和58年度

1984．12

香川県教育委員会

目　　次

頁
例　言
昭和58年度埋蔵文化財保護行政・調査の概況……2
昭和58年度調査の概要……9
白鳥廃寺（第3次）……9
三谷三郎池西岸窯跡……11
西村遺跡（川北東地区）……15
十瓶山西2号窯跡……17
特別史跡 讃岐国分寺跡……19
下土居遺跡……21
羽佐島遺跡……25
岩黒島（小中学校移転及び市道建設に伴う調査）……27
五条遺跡……29
仲村廃寺……30
谷田古墳……32
四国横断自動車道埋蔵文化財調査概況……34
金蔵寺下所遺跡……36
稲木遺跡……38
財田古墳群……40
森1～5号塚……42
延命遺跡……44
矢の岡石棺墓……46
大 木 塚……48
埋蔵文化財詳細分布調査……50
櫃石島・大浦浜遺跡の遺物整理報告……52
資料紹介 葛谷遺跡出土の弥生土器……54
普及活動から 第6回埋蔵文化財発掘調査報告会……62

例　　言

1．本書は，昭和58年度(1983年度)に香川県教育委員会が発掘調査を行なった遺跡の概要と整理作業の成果の一部を収めたものである。
2．遺跡の位置は図(P7～8)に示し，遺跡・調査の概要等は一覧表(P2～5)に示した。
3．本文頁は通し番号としたが，挿図・図版番号は遺跡ごとに付した。
4．遺跡の配列は，原則として東から西の地域への順とした。
5．香川県教育委員会事務局文化行政課職員が担当した遺跡は各市町の了解のもとに収録した。
6．各項目の編集は執筆者が行ない，全体編集を小西正行・薦田耕作・松野一博が担当した。

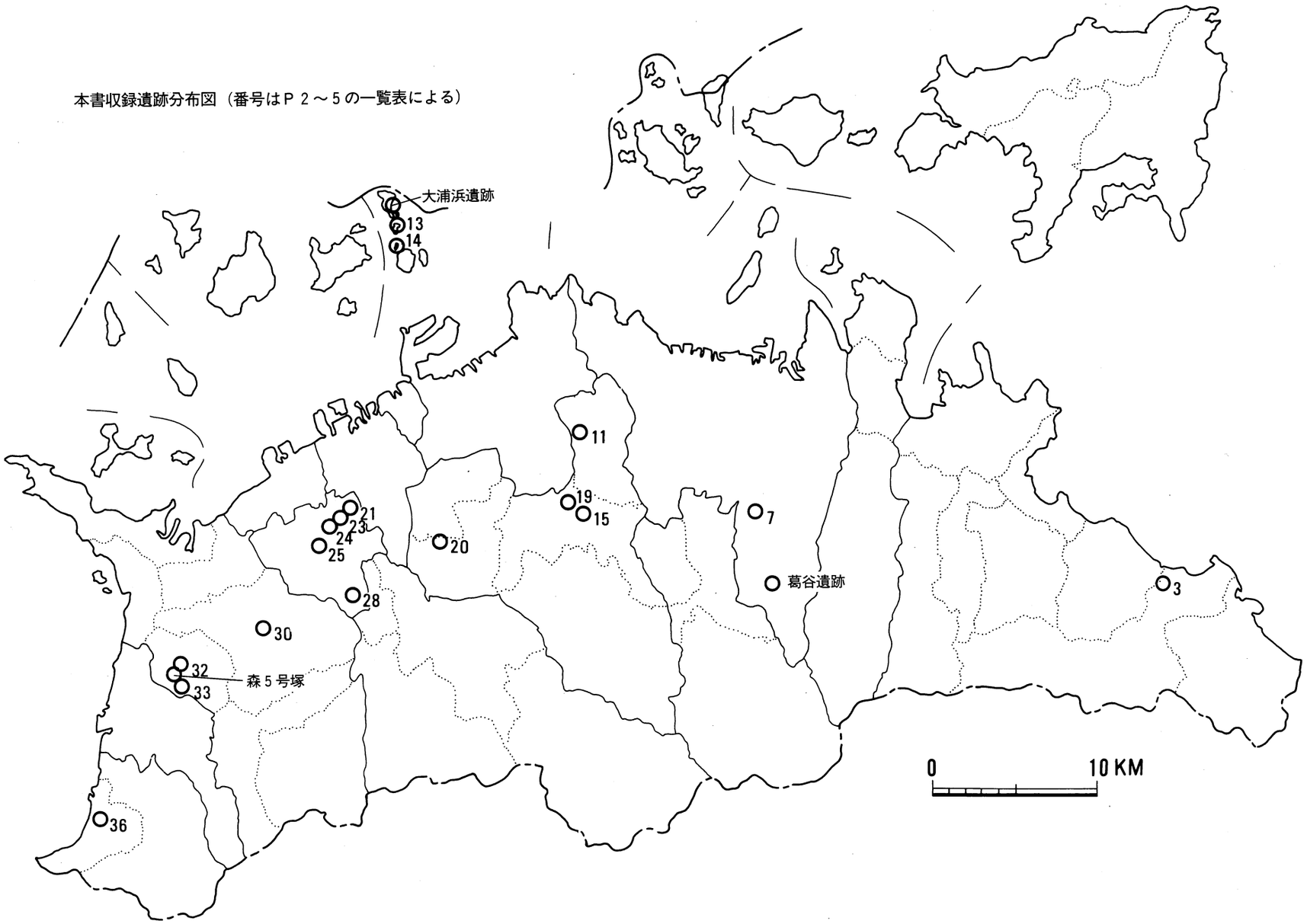
番号	名称	遺跡			調査	
		所在地	種類	時代	原因	原因者
1	川北古墳	大川郡引田町小海	古墳	古墳時代	保存整備に伴う確認調査	町教委
2	藤井古墳	〃 白鳥町白鳥字西藤井	〃	〃	〃	〃
3	白鳥廃寺	〃 白鳥町湊	古代寺院	古代	〃	県教委
4	川東古墳	〃 大川町富田中川東	古墳	古墳時代	確認調査	〃
5	極楽寺遺跡	〃 寒川町石田東	墓地	室町時代	圃場整備に伴う確認調査	町教委
6	久米池南遺跡	高松市新田町ほか	集落跡・石棺群	弥生時代	採土に伴う確認調査	個人
7	三谷三郎池西岸窯跡	〃 三谷町	須恵器窯跡	古墳時代	確認調査	県教委
8	かしが谷古墳	〃 鬼無町是竹	古墳	〃	農道建設に伴う確認調査	市教委
9	平木2号墳	〃 鬼無町佐藤	〃	〃	学術調査	香川大学
10	平木3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
11	讃岐国分寺跡	綾歌郡国分寺町国分字上所	古代寺院	古代	史跡整備に伴う確認調査	町
12	西山古墳	坂出市府中町西山	古墳	古墳時代	石垣工事	個人
13	岩黒島遺跡	〃 与島町岩黒	旧石器包蔵地	旧石器時代	小・中学校建設に伴う事前調査	市・市教委
14	羽佐島遺跡	〃 〃	〃	〃	瀬戸大橋架橋工事に伴う事前調査	本四公団
15	西村遺跡（川北東）	綾歌郡綾南町陶	集落跡など	古代末～中世	圃場整備に伴う緊急発掘調査	個人
16	西村遺跡	〃 〃 〃	〃	〃	圃場整備に伴う立会	〃
17	西村北遺跡	〃 〃 〃	〃	〃	ガソリンスタンド建設に伴う確認調査	町教委
18	十瓶山窯跡群	〃 〃 〃	須恵器窯跡	古代	県有地整備に伴う事前調査	県
19	十瓶山古窯跡群	〃 〃 〃	〃	平安時代	住宅建設に伴う事前調査	県住宅供給公社
20	下土居遺跡	〃 綾歌町岡田東	集落跡・包含層	弥生時代～古墳時代	圃場整備に伴う事前調査	町
21	五条遺跡	善通寺市原田町	遺物包蔵地	〃	範囲確認のための調査	県教委

査						
面積(㎡)	発掘主体	負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
200	町教委	町教委	発掘調査後保存	98条の2	香川大学	58. 8. 1 58. 8. 31
100	〃	〃	〃	〃	〃	58. 8. 20 58. 10. 31
20	県教委	県教委	発掘調査後保存整備	〃	大山・松野	58. 5. 6 58. 5. 20
800	〃	〃	測量調査	〃	東原・安田	59. 3. 21 59. 3. 28
100	町教委	町教委	発掘調査	〃	町教委職員	58. 8. 15 58. 8. 19
500	市教委	市教委	〃	発見届57条の5 発掘届98条の2	市教委職員	58. 12. 19 59. 3. 31
50	県教委	県教委	発掘調査後保存	98条の2	松野・松本 岩橋(歴民)	58. 11. 1 58. 12. 2
110	市教委	市教委	発掘調査後保存	〃	市教委職員	58. 7. 11 58. 7. 31
50	香川大学	香川大学	発掘調査	57条	香川大学	58. 7. 13 58. 7. 23
100	〃	〃	〃	〃	〃	59. 3. 10 59. 4. 10
9,000	町教委	国・県・町	発掘調査後整備	98条の2	町教委職員 発掘指導 東原	58. 10. 8 59. 2. 29
			現状保存	発見届57条の5		
7,800	文化財保護協会 坂出支部	市	発掘調査	57条の3	文化財保護協会 坂出支部 発掘指導 真鍋	58. 10. 4 58. 11. 4
1,600	県教委	本四公団	〃	〃	小西・真鍋・安藤	58. 7. 1 58. 10. 31
100	〃	県教委	〃	57条の2	松野	59. 3. 7 59. 3. 27
2,961			町教委立会のもと工事	〃	町教委職員	58. 4. 10 58. 4. 15
803	町教委	国・県・町	発掘調査	98条の2	〃	58. 10. 3 59. 3. 31
500	県(企画部)	県	〃	57条の3	県企画部職員	58. 1. 24 58. 7. 31
150	町教委	県住宅供給公社	〃	〃	町教委職員 発掘指導 安田	58. 4. 18 58. 6. 24
100	〃	県・町	〃	〃	町教委職員 発掘指導 松野	58. 10. 31 58. 11. 9
60	県教委	県教委	〃	98条の2	安田	58. 7. 18 58. 7. 27

番号	名称	遺跡			調	
		所在地	種類	時代	原因	原因者
22	五条遺跡	善通寺市原田町	遺物包蔵地	弥生時代～古墳時代	市有地売却に伴う確認調査	市教委
23	金蔵寺下所遺跡	〃 金蔵寺町	建物跡・条里	奈良時代～平安時代	四国横断自動車道建設に伴う事前調査	道路公団
24	稲木遺跡	〃 下吉田町	集落跡など	弥生時代～古墳時代	〃	〃
25	仲村廃寺	〃 善通寺町	古代寺院	古代	市有地売却に伴う確認調査	市教委
26	彼の宗遺跡	〃 弘田町字彼の宗	集落跡	弥生時代	河川改修に伴う事前調査	建設省
27	鶴ヶ峰4号墳	〃 生野町ほか	古墳	古墳時代	確認調査	県教委
28	谷田古墳	〃 大麻町	〃	〃	農道建設に伴う事前調査	県土地改良課
29	宮の尾遺跡	三豊郡三野町大見字宮の尾	遺物包蔵地	弥生時代～	圃場整備	町
30	矢の岡石棺墓	〃 高瀬町上勝間	箱式石棺	古墳時代	保存整備に伴う確認調査	町教委
31	竹田遺跡	〃 豊中町本山	住居跡	弥生時代～中世	圃場整備に伴う調査	町
32	財田古墳群	〃 〃 上高野	古墳	古墳時代	四国横断自動車道建設に伴う事前調査	道路公団
33	延命遺跡	〃 〃 〃	中世遺構	鎌倉～室町時代	〃	〃
34	不動の滝付近の弥生遺跡	〃 〃 大字岡本滝止	住居跡	弥生時代	公園建設に伴う確認調査	町教委
35	観音寺（高丸）城跡	観音寺市観音寺町	城跡	中世末～近世	下水道工事に伴う立会調査	市
36	大木塚	三豊郡豊浜町和田	塚	中世	圃場整備に伴う確認調査	町教委
37	埋蔵文化財詳細分布調査	高松市ほか3市9町				県教委

査							
面積(㎡)	発掘主体	負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
250	市教委	市教委	発掘調査	98条の2	市教委職員	58. 10. 17 58. 11. 10
8,000	県教委	道路公団	〃	57条の3	廣瀬・大山・池内 薦田・片桐・河野	58. 4. 1 59. 3. 31
6,000	〃	〃	〃	〃	岸上・野中・中本	58. 6. 29 59. 3. 31
1,200	市教委	市教委	〃	98条の2	市教委職員 発掘指導 安田	58.8.1～8.31 (一次) 58.11.15～ 59.2.10(二次)
3.635	市教委	建設省	〃	57条の3	市教委職員	59年度調査
1,500	県教委	県教委	測量調査	98条の2	安田・小西・西岡	58. 6. 6 58. 6. 14
100	谷田古墳 発掘調査団	県・市教委	発掘調査	発見届57条の6 発掘届57条の3	調査団 発掘指導 安田	58. 10. 17 58. 11. 10
			現状保存	発見届57条の6		
30	町教委	町教委	発掘調査後 保存整備	発見届57条の5 発掘届98条の2	町教委職員 発掘指導松野・西岡	58. 7. 11 58. 7. 31
			発掘調査			59年度調査
1,000	県教委	道路公団	〃	57条の3	大山・池内・片桐	58. 9. 26 58. 11. 30
5,000	〃	〃	〃	〃	〃	58. 11. 28 59. 3. 31
1,982	町教委	町教委	〃	98条の2	町教委職員	58. 5. 2 58. 5. 30
24			市教委立会 のもと工事	57条の3	市教委職員	58.5.20～6.30 58.8.10～8.13
100	町教委	町教委	発掘調査後 保存整備	発見届57条の5 発掘届98条の2	東原・安田	58.10.22～24 58.1.9～59.3.2
	県教委	国・県	分布調査		県職員	58. 4. 1 59. 3. 31

本書収録遺跡分布図（番号はＰ２～５の一覧表による）



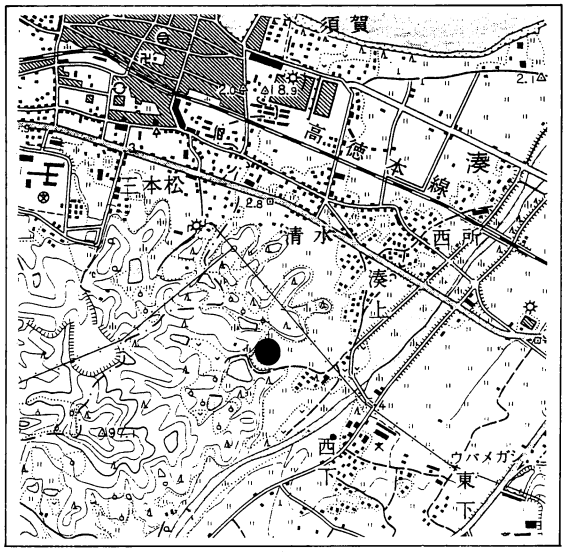
白鳥廃寺（第３次）

所在地　大川郡白鳥町湊　　58．５．６～58．５．20

白鳥廃寺は昭和43年度に白鳥町教育委員会が主体となって確認調査を実施し，塔心礎石，金堂跡と推定される基壇と礎石群を検出し，県史跡に指定された。

昭和57年度に寺域内に農道が新設されることになり，あわせて塔跡周辺の整備を行うことになり，香川県教育委員会が確認調査を実施した。その結果，塔基壇の基底部が検出され，規模は一辺12.3mと推定された。

しかしながら，塔基壇は大幅な削平をうけており，北辺と西辺が未調査であった。保存整備に際しては，この部分の確認が必要であったため，今年度も引き続き調査を実施することになった。



白鳥廃寺の位置
（1/25,000「三本松」）

今回の調査では心礎石を中心にして，北辺にＡトレンチ（４×４m），西辺にＢトレンチ（3.5×４m），南辺にＣトレンチ（４×２m），北西隅にＤトレンチ（3.5×４m）を設定して調査を進めた。

Ａトレンチでは，現在の耕作土を除去するとすぐに，心礎石より北5.8mの地点で，基壇版築土と思われる明黄緑色土が現われた。化粧と思われる川原石積みなどは検出できなかった。一部土層確認のため，基壇の断ち割りを行った結果，版築土が約40m残存していることが確認できた。

Ｂトレンチにおいても，耕作土直下で薄青緑色の版築土を検出した。この層の端は心礎石より西へ5.8mの地点である。このトレンチにおいても一部基壇の断ち割りを行った結果，基壇の築造状況が判明した。

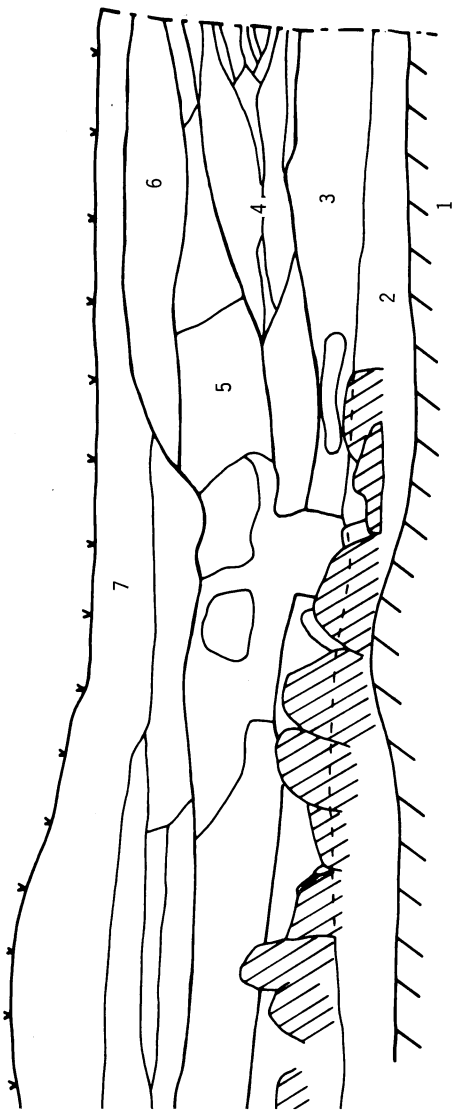
この地点においては，地山は心礎石上面より1.4m下の淡緑色土である。この上に黒灰色砂質土が約10cmの厚さにあり，広範囲にある。この上からが基壇の盛土になり，まず灰黒色砂質土が約20cmあり，この層中には人頭大の川原石が多く入り，瓦片も少量混っており，基壇の基礎になる地業で，この上に花崗土が２～５cmの厚さに版築されている。この版築土全体の厚さは20cmぐらいである。さらにこの上に20cmほどの灰緑色土があり，現在の基壇残存の上面となる。

Ｃトレンチは，基壇端のラインと，部分的に残存していた川原石積み化粧を再確認した。

Ｄトレンチにおいては，北西コーナが推定どおりの位置にあるかいなかを確認するため発掘

したが，その結果，かなり削平は受けていたものの，隅丸の状態で基壇を検出できた。残念ながら基壇化粧は残存していなかった。

今回の再調査の結果，北辺と西辺については，基壇版築土は確認できたが，化粧は残っていず，基壇の規模は正確には把握できなかった。しかしBトレンチにおいて基壇の構築状況が判明したのは大きな成果であった。遺物については，瓦が多く出土したが，本格的な整理は行っていないので，別の機会に改めて報告することにしたい。



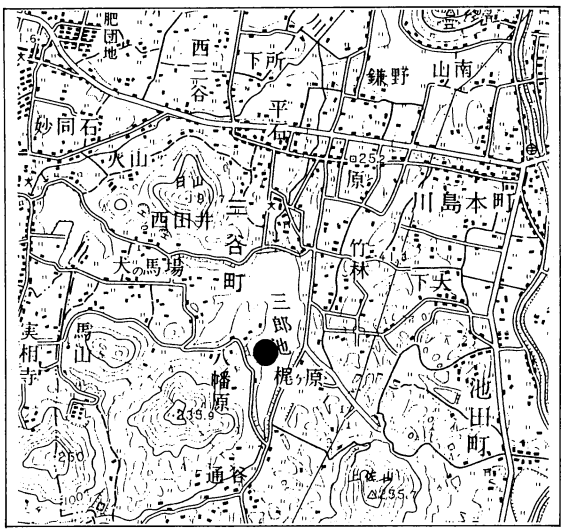
① 地山
②③ 灰黒色砂質土
④ 版築土
⑤ 灰色砂質土
⑥ 淡青緑色土
⑦ 耕作土

白鳳廃寺　塔跡西側トレンチ北壁土層図（1/20）

三谷三郎池西岸窯跡

所在地　高松市三谷町4695－1　　58．11．1～58．12．3

三谷三郎池西岸窯跡は，三郎池の西岸，日妻山の東へ延びる尾根の先端部の堤中にある。三郎池の池底からは縄文時代から中世に至る遺物が表採できるが，本窯跡付近からは少量ながら非常に古い形態をもつ須恵器片を採集しており，本窯跡に対する学術的な興味が高まってきた。しかし，池の汀線付近に立地するということで，放置しておくと浸食作用等で流失してしまうことは必至であることから，今年度の重要遺跡確認調査の一環として瀬戸内海歴史民俗資料館の協力を得て，香川県教育委員会が確認調査を実施した。



三谷三郎池西岸窯跡の位置
（1/50,000「高松南部」）

窯跡は三郎池西岸の傾斜面に他の円礫と混じって窯壁が楕円形状に露出し，その中に天井部が落盤した状態で遺存していた。池水による，浸食等で煙道，燃焼部及び灰原上部は既に流失しており，調査の結果，本窯跡の構造及び規模について，焼成部残存長5m最大幅2.15mで，床面の傾斜約15°の無段の登窯であることと，約4m下方に灰原約16m²が遺存することが判った。

床面の平面プランは「まむしの頭」を連想する形をもち，円礫と砂混じりの粘土を貼ってあった。床面を修復した痕跡はなかった。床面中央を縦断するように3個の円形の掘り方をもつ柱穴を検出したが性格等は不明である。その他，前庭部付近を横断するように溝が切られていたが，その底から7世紀代の須恵器大甕ほぼ1個体が出土しており，本窯跡とは直接関連はない。

窯本体に残された遺物は小片ばかり約70点で，大部分が大型の甕の破片であった。灰原は基本的には一層で，20cmほどの厚さしか遺存しておらず，遺物の包含量も少なかった。

従来，在地の研究者の地道な表採資料の蒐集によって，三谷三郎池西岸窯跡は香川県の須恵器生産の草創期を画するもので，その操業時期は6世紀末頃に比定されていた(1)が，今回の調査で出土した遺物の特徴を検討するとその大部分は大型の甕の破片で，その口縁部に一条の凸帯が巡ること，端部を丸く仕上げていること等の特徴をもつことから，『陶邑』(2)のⅠ型式と併行することが考えられるようになった。

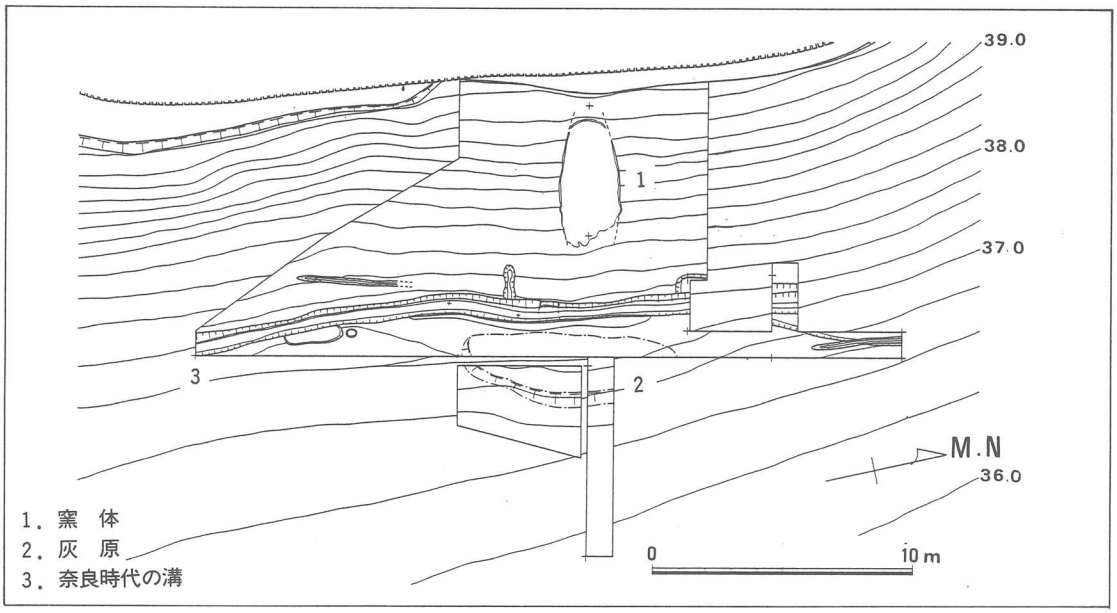
さらに本窯跡の北東約0.7kmに刳抜式石棺をもつ三谷石舟古墳が位置することを考えあわせると，一基しか発見されておらず，しかも短期間の操業であるとは言え，本窯跡は香川県の古

墳時代の研究上重要な意義をもつことになる。

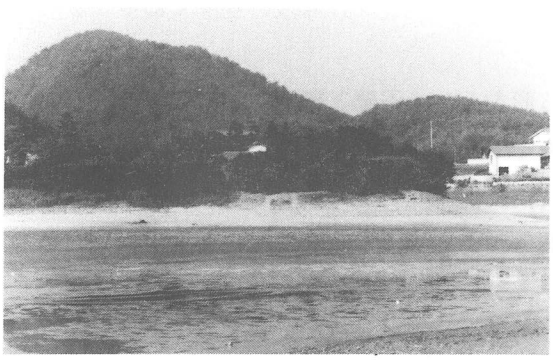
（註）

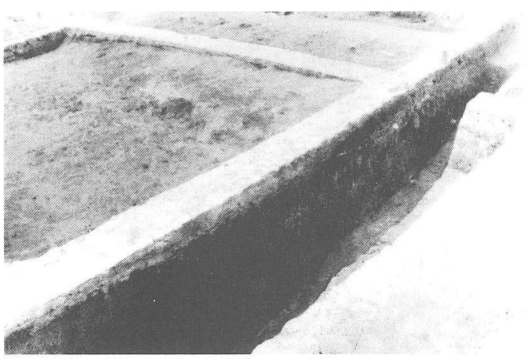
(1) 渡部明夫　1980．10「讃岐国の須恵器生産について」　『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

(2) 中村浩　1978．3　「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」　『陶邑Ⅲ』第6章



発掘区地形測量図及び遺構配置図

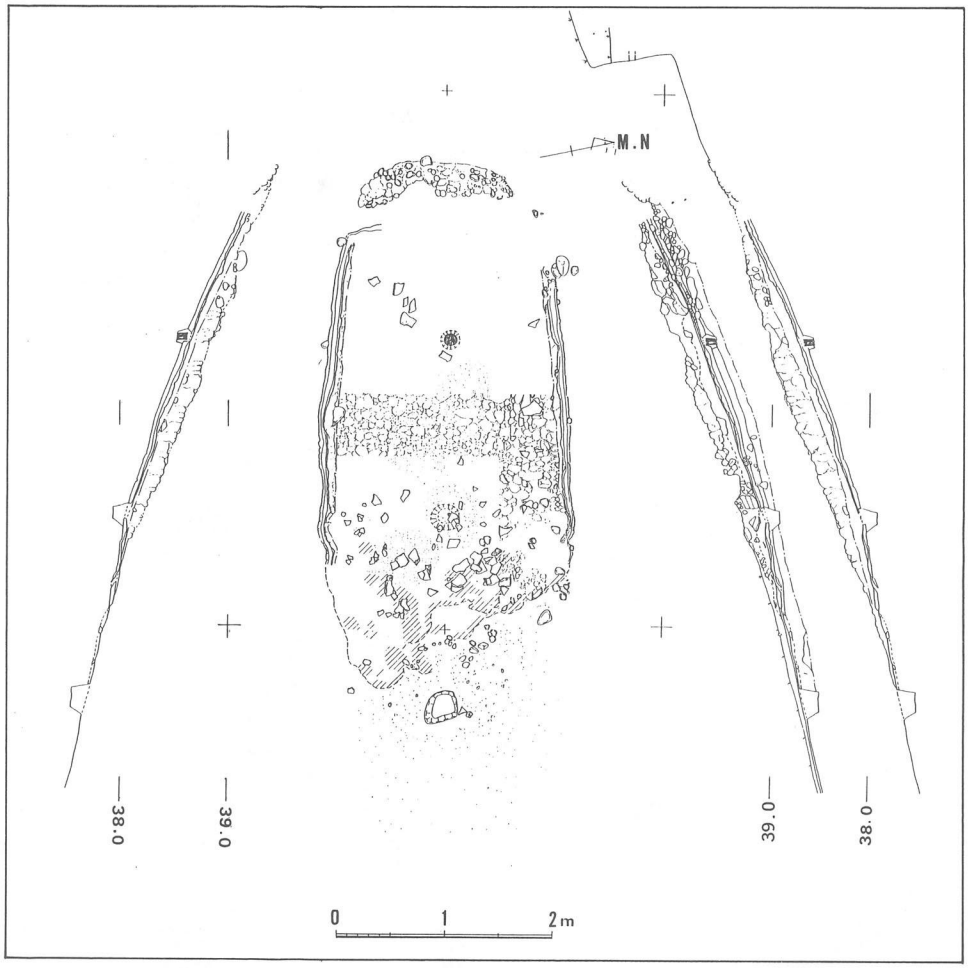




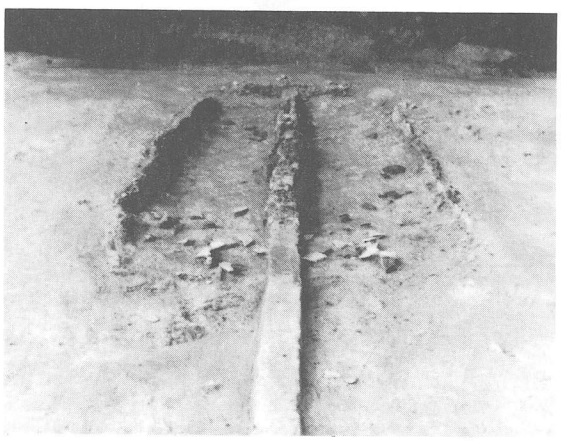
左上：対岸（東岸）より発掘区を臨む

右上：発掘区全景（南より）中央よりの須恵器甕は奈良時代の溝より出土のもの

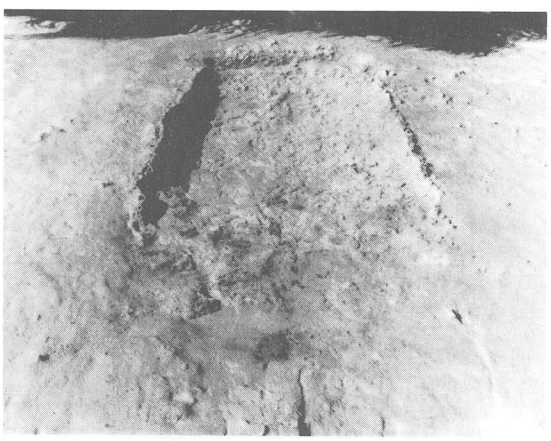
左下：灰原上面と断面



窯本体床面平面プラン及び縦断面と南北両側壁見とおし実測図

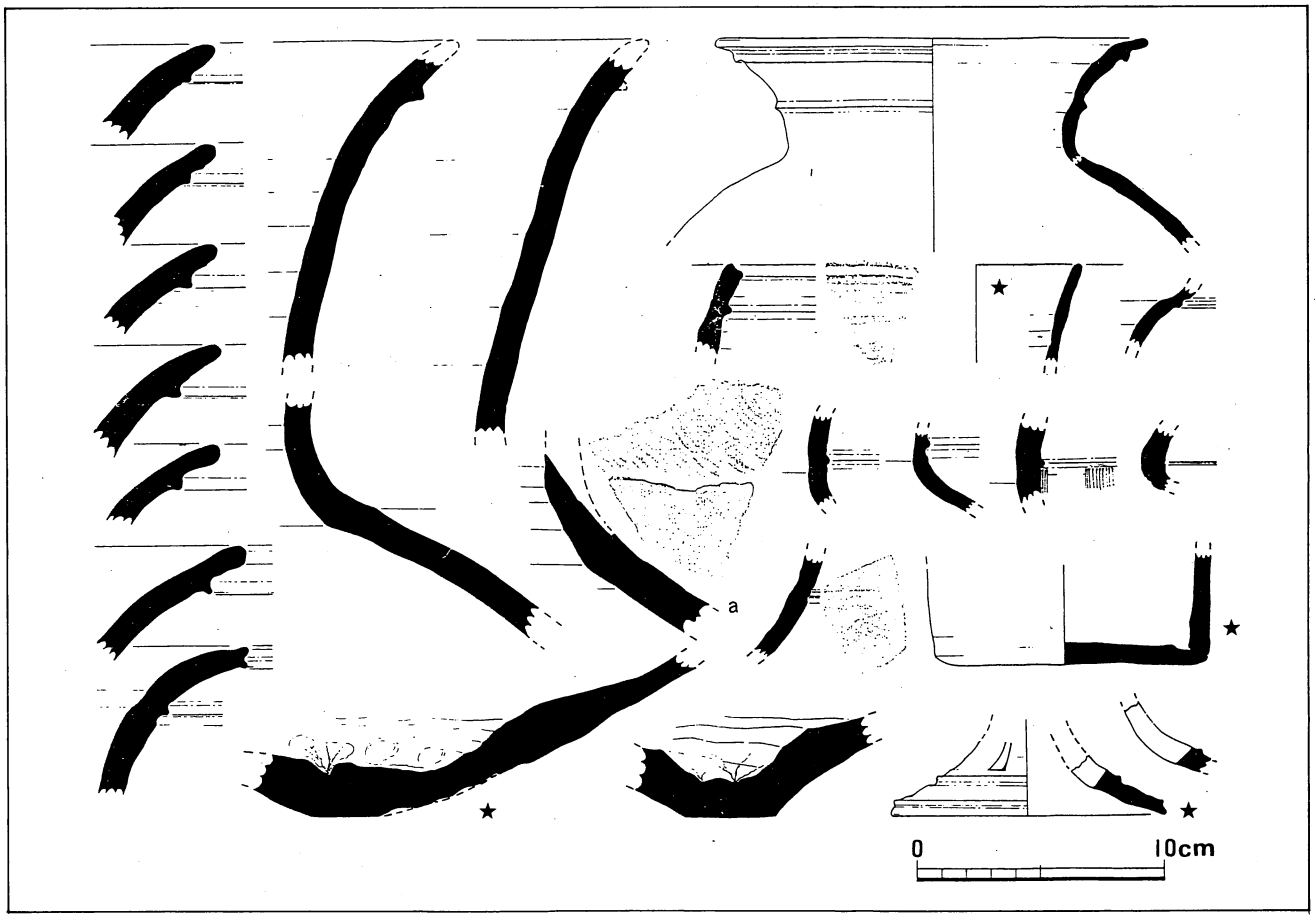


窯体内遺物出土状況



窯体床面検出状況

★印は
窯本体より出土したもの
ａは甕の肩部で粘土の輪積みが剝がれた状態を実測したもの。外面はすり消してあるが，剝落面には粘土が接着しやすいよう調整が加えられている。



出　土　須　恵　器　実　測　図 (Scale 1/3)

西村遺跡（川北東地区）

所在地　綾歌郡綾南町陶字川北東　　59．3．7～59．3．27

国道32号線綾南バイパス建設に伴う発掘調査（昭和54～56年度）で，古代末から中世の集落跡であることが判っていた西村遺跡の範囲内と推定した地域で圃場整備を実施する旨届出があったのをうけて，西村遺跡の範囲を確認するため，香川県教育委員会が主体となって約100㎡のトレンチ調査を実施した。

調査対象地は十瓶山東南麓のバイパスの北辺に隣接する水田である。先年行われた発掘調査で複雑な切りあいをもつ土坑群を検出したN35・36区は現在国道の北側ののり面になっており，今回調査の対象となった地点はその東北側の圃場約3,000㎡である。

調査地区の位置（1/25.000「滝宮」）

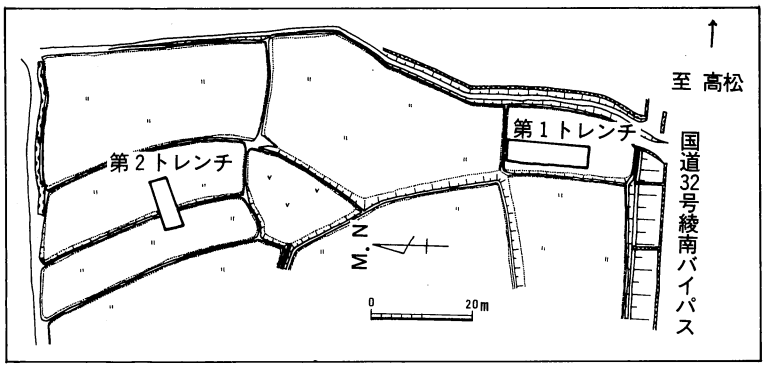
幅4m，長さ10m・15mの2本のトレンチを設定し調査を進めた。2箇所を通じて土層序は，大別すると，耕作土（第1層）床土（第2層）黄褐色粘質土（第3層）の3層に分けることができる。

第3層上面で径10～13cmのピットを数個検出した。ピットの埋土は灰色の粘質土及び暗灰褐色の粘質土で，列をなすものもあるが，建物跡と判断できるものはなかった。またピット内からの遺物は磨滅した土器の小片のみで，時代等性格も不明である。遺物は，第1層，2層より土師質土器・須恵器，瓦質土器の磨滅した小片ばかりが，コンテナ1箱程度出土した。第3層より下からの遺物の出土は皆無であった。一部たちわって土層を確認したところ，第3層は，粘土や砂がほぼ水平に交互にあらわれてくることから自然の堆積によるものと思われ，無遺物であることから，地山層と判断するのが適当であろう。

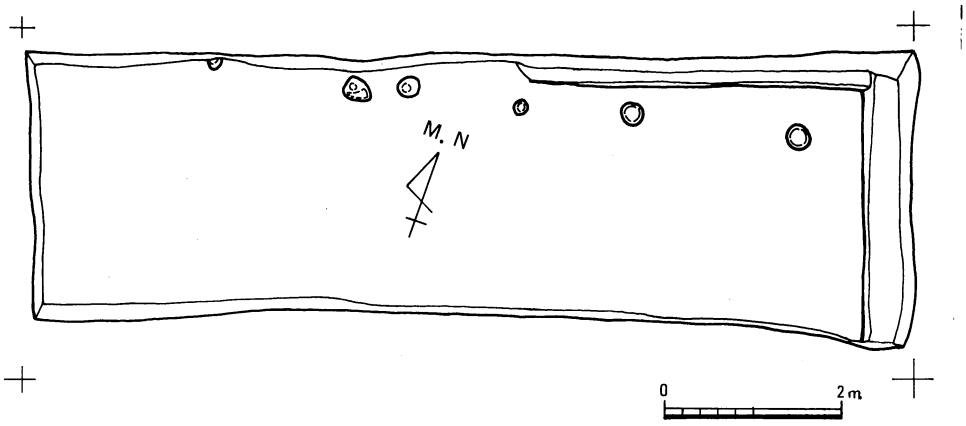
その他，付近の表土上より瓦器椀，亀山焼の破片等を採集している。

期間等制限があり，充分な調査はできなかったが，顕著な包含層や，溝，土坑等の遺構は調査区内からは認められなかった。さらに地形から観ても，調査対象地はお寺川へ北から注ぎ込む谷筋へ向ってやや下り気味の部分であり，地山までが浅くしかも水平な推積をみせることから，削平を近い過去に受けた可能性もある。

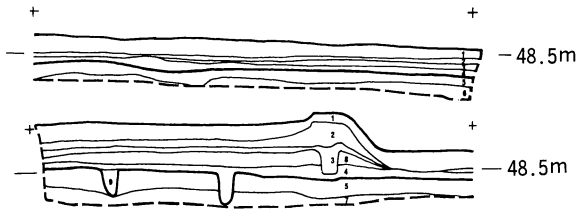
以上の資料より調査対象地は西村遺跡の東北の端の希薄な部分と判断したものである。



第1図　調査区地形測量図及びトレンチ配置図



1　耕作土（あま土）
2　灰黄褐色粘質土
3　青灰色砂質土
4　青灰色粘質土
5　灰黄色粘質土（地山）
（西へゆくほど赤味がかる）
6　灰白色粘土（地山）
7　淡灰橙色粘土（地山）
8　青灰褐色砂質土
9　暗灰褐色砂質土



第2図　第2トレンチ平面実測図及び北壁土層実測図

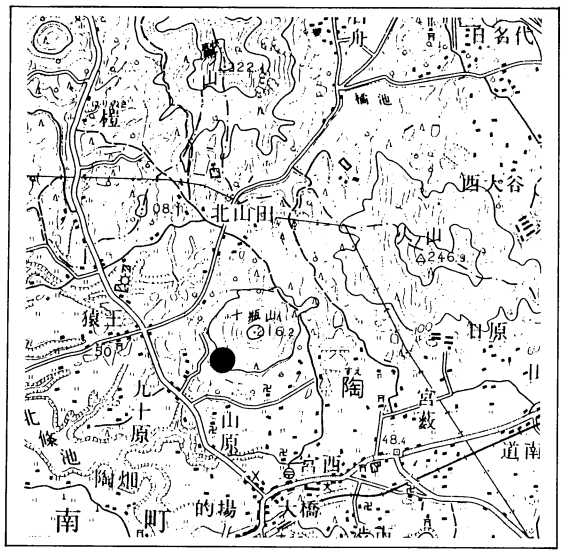
十瓶山西２号窯跡

所在地　綾歌郡綾南町陶　　58．４．17～58．６．24

綾南町陶に所在する標高216mの十瓶山の麓には，多数の窯跡が存在することが知られている。

この十瓶山の西麓で，県住宅供給公社による宅地造成工事が施工されており，十瓶山西２号窯・大師堂１・２号窯の３基がこの工事により消滅する事態となった。

綾南町教育委員会は，県住宅供給公社の委託を受け，この３基の窯跡の発掘調査を実施することとなった。調査は香川県教育委員会の指導の下，４月17日から６月24日まで行われた。



十瓶山西２号窯跡位置図

十瓶山西２号窯は十瓶山の西麓85～90mの斜面に位置する。隣接する窯跡としては十瓶山西１号窯があり，本遺跡よりさらに50mほど山に入った地点に位置している。この１号窯は須恵器窯で甕・壺の破片が灰原付近より出土しており，大形品を焼いていた窯と考えられ，平安時代前期と思われる。

天井部は既に消失してしまっており，側壁と床面を僅かに残すのみであった。床面は約４m残っていたが，燃焼部・焚口は既に自然流水の浸食作用により亡失している。

焼成部の幅は120～40cmあり，焼成部奥に向かうほど狭くなっている。焼成部と燃焼部の境の床面は残存していなかったが，焼土層の広がりから推定して焼成部奥より約4.5mの地点であろう。煙道も残存していないが，同様な方法で考えてみると，約１mの長さと思われる。

床面は３面確認できた。一次床面の破損を部分補修したのが二次床面である。この面にさらに５cmの砂質土を敷いて三次床面を作っている。三次床面の粘土は一・二次面に比べ焼きが悪い。

側壁は部分的に残っており15cmを計るが，これだけで立ち上がり・天井部の高さを推定することは困難である。

灰原の現状は長さ12～13m，幅２～３m，厚さ10～30cmである。灰原の中央付近が流失しており，元来はもっと広がりをもっていたものと考えられる。灰原は２つに分けられ，上層は須恵器の杯・皿・椀の破片を大量に含むが，下層は炭灰がほとんどで遺物の出土量は少ない。

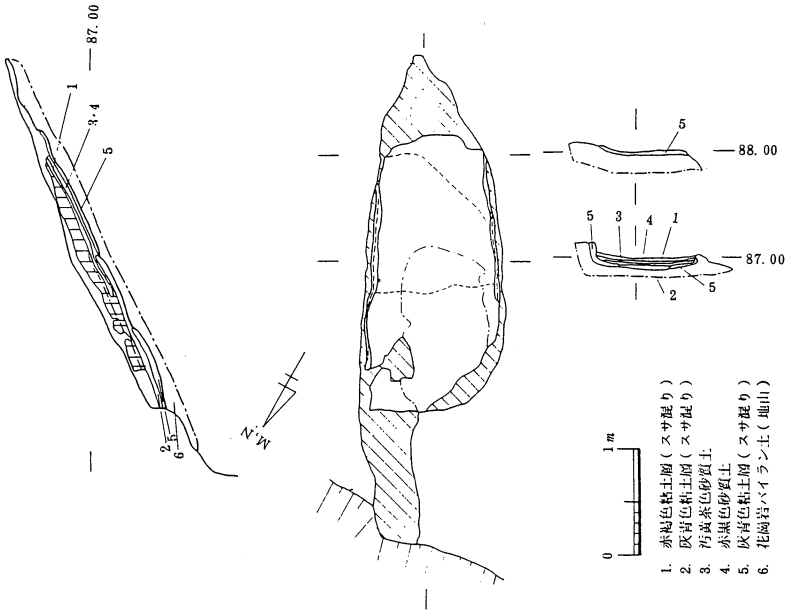
灰原除去後，石列を検出した。石材は十瓶山産の安山岩で，挙大から幼児頭大の石が無雑作に灰原に沿って敷かれていた。時期は窯と同時代かそれ以前に形成されたものと思われる。こ

の石列が人為的かそれとも自然現象の所産に因るものかは，今後の検討を待ちたい。

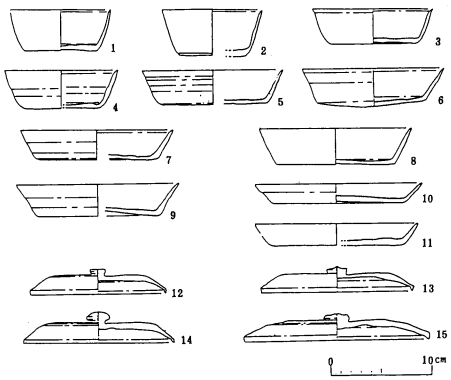
遺物は窯と灰原より出土した。窯より出土したのは甕・壺の破片が数点で，灰原からは杯・皿などの小形品がコンテナ箱7個の量で出土した。灰原より出土した須恵器の時期差はみられず，平安時代前期に比定できる。

十瓶山西2号窯は，平安時代前期に小形品製作のために操業していたと考えられ，付近の1号窯で大形品の製作を行っていた事を考え合わせると，窯の分担がある程度確立していたと推定できる。

なお，綾南町教育委員会より，3基の窯跡の調査報告書が刊行される予定なのでそれを参照されたい。



第1図　十瓶山西2号窯実測図

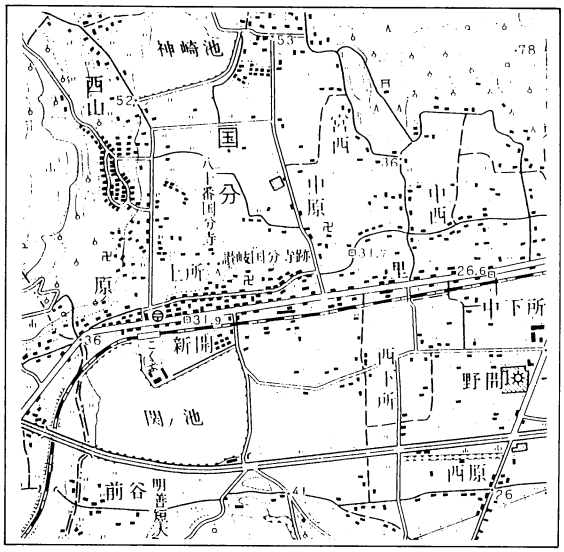


第2図　須　恵　器

特別史跡　讃岐国分寺跡

所在地　綾歌郡国分寺町国分字上所　　58．9．1～59．3．31

讃岐国分寺は昭和3年3月24日内務省告示第70号により，昭和27年に特別史跡指定されている。伽藍配置は下野・周防・甲斐の国分寺同様，西中央方式で，金堂跡・塔跡の礎石が各32・15個遺存している。推定寺跡は東西227m，南北233mでその東・北・西縁には細長い地割があり，寺域推定の根拠となった。今年度の調査主目的は寺域の確認で，9,000m²を調査対象とした。調査は文化庁・奈文研・県教委の指導で国分寺町教委が昭和58年9月1日～59年3月31日まで実施した。昭和58年度国庫補助事業である。



国分寺跡位置図

東築地基壇跡を検出した。それは，本堂・仁王門のセンターラインと同方位で，基底部幅270cm，上部幅240cmを計測する。築地基壇跡両サイドには瓦列が遺存していたが，雨落ち溝・柱穴跡などの遺構は検出されなかった。東築地基壇跡は北縁で西に折れ，北築地基壇跡となっている。北築地基壇跡は未買収地の関係で，南肩部を検出したにすぎないが，2箇所で排水溝と思われる遺溝を伴っている。築地基壇跡の築成時期は，奈良時代後半の軒丸瓦の出土などから創建時と思われる。溝については，築地基壇跡に沿うこと，溝底から出土した黒色土器が11世紀に比定できることなどから築地基壇築成時と推定している。

出土遺物は瓦・塼・須恵器・土師器・黒色土器・瓦質土器・白磁・青磁・鉄釘などである。瓦は複弁六葉蓮花文・複弁八葉蓮花文・単弁八葉蓮花文軒丸瓦，均正唐草文軒平瓦のほか，丸瓦・平瓦・鬼瓦の破片など多量に出土している。丸瓦には「國分金光明○」とヘラ描きされたものも出土している。

東築地基壇跡の検出は国分寺創建時における東域を推定し，従来の寺跡について再検討を迫るものとなった。

讃岐国分寺跡では発掘調査事業と併行して整備保存事業も進行しており，史跡公園化への基礎を固めている。

なお，発掘調査の内容については特別史跡讃岐国分寺跡－昭和58年度発掘調査概報 ― が国分寺町教育委員会から刊行されているので参照されたい。

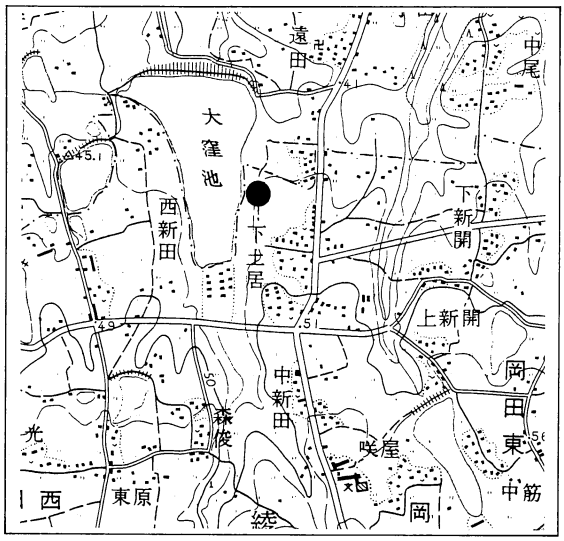
第１図　ヘラ描きされた丸瓦（『國分金光明○』）

第２図　検出された遺構（築地基壇・溝・瓦列）

下土居遺跡

所在地綾歌郡綾歌町岡田東下土居　　58. 10. 31～58. 11. 7

下土居遺跡は，町営圃場整備事業に伴う工事の際に弥生土器を中心に多数の土器片が出土したことで発見された。協議の結果，現状より深く掘削することはないことを考慮にいれて，綾歌町教育委員会が主体となって県教育委員会の協力のもと，遺跡の性格と範囲の確認を目的とする発掘調査を実施することとなった。



下土居遺跡位置図

本遺跡は南から北へ舌状にのびる洪積台地の南西端部のたいへん眺望のよい所に位置する。岡田の台地は近世の開墾によって現在のような水田地帯になったことはよく知られているが，遺跡の直下の大窪池では弥生土器から近世の遺物が表採できるし，さらに西隣りの新池周辺には岡田万塚として知られる数十基にも及ぶ古墳群がある。また台地一帯には五輪塔や塚も多く，台地上では先人が何らかの生活を営んでいたことは確かである。

今回の調査では対象地区に1.5×10mのトレンチを２ヶ所設定した(南側を第１トレンチ，北側が第２トレンチ)。第２トレンチ付近は，工事による削平が著しく，地表面に柱穴等の掘り方が薄く現れていたため，発掘区を拡張した。

遺構としては，第１トレンチから竪穴式住居跡の可能性の高いもの，第２トレンチ付近から41個の柱穴及び土坑を検出した。住居跡と判断する根拠はSD02が外側に高く内側に低いＪ字状の断面を呈すること，SX01の埋土より焼土や焼け石を検出していることからSD02を竪穴の掘り込み，SX01を炉跡と推測し易いことの２点である。第２トレンチ付近の柱穴群のなかで，２間×２間の円形の掘り方をもつ掘立て柱の建物跡が検出できた。

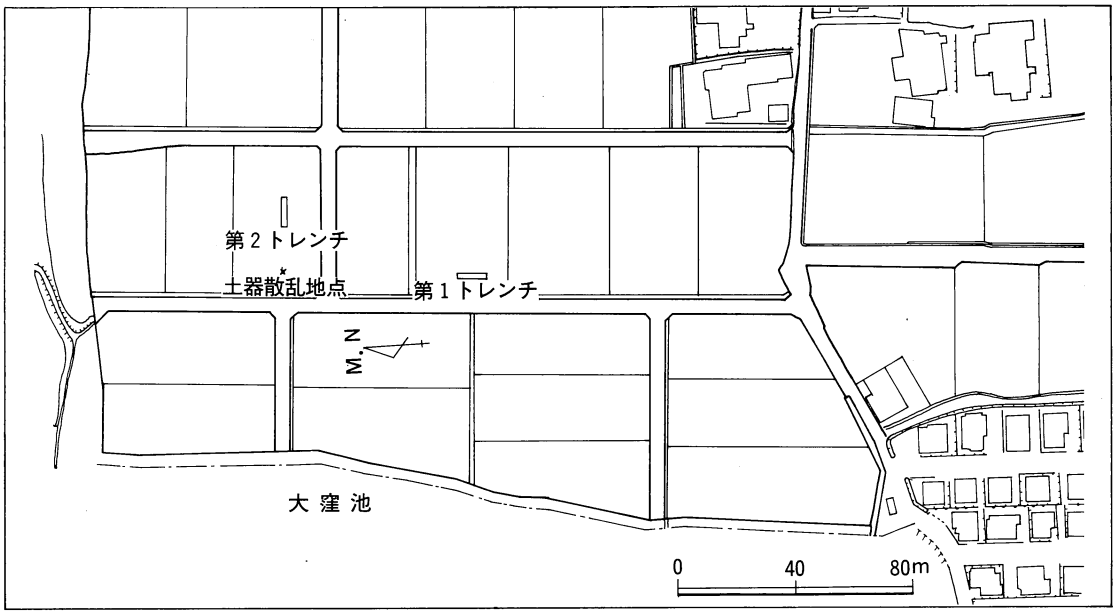
今回の調査で出土した遺物は殆んどが弥生土器であった。同時代のものとしては石鏃が１点ある。表採では須恵器・土師器も少量採集している。

弥生土器には，壺・甕・高杯・鉢等があった。いずれも磨滅が著しく調整・文様等は不明確であったが，外面の調査は　(1)叩きによるもの，(2)叩いた後刷毛を施したものの両方のタイプがある。また，胎土についても　(1)石英・長石が中心のもの，(2)金雲母のめだつものの両方がある。

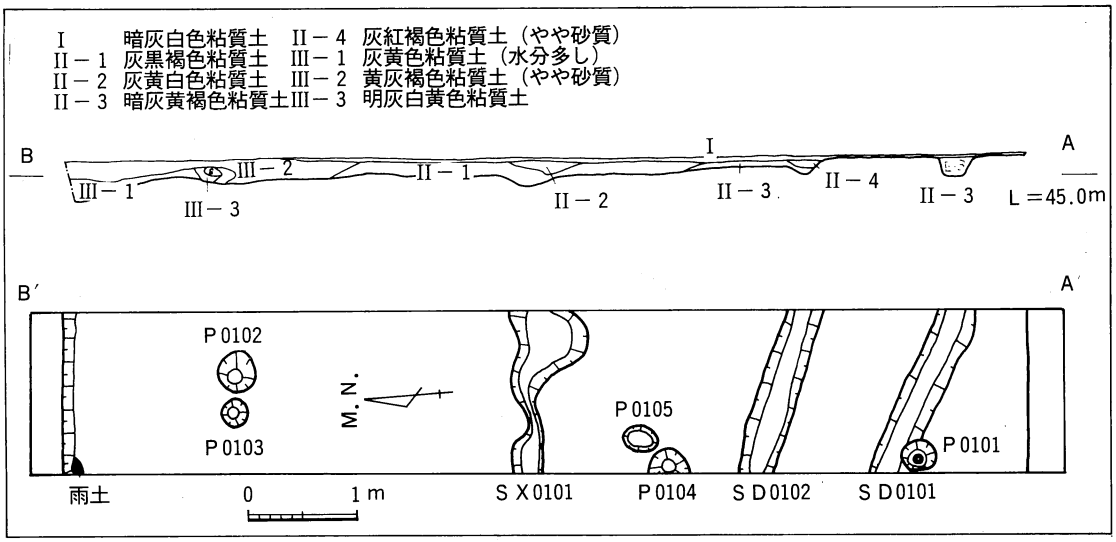
時代については，遺物の口縁部や底部の特徴や調整の技法などから，弥生時代後期末から古

墳時代初頭という時期が考えられる。ただ，4の甕のように口縁端部に凹線をもつものもあり，弥生時代中期までさかのぼることも考えられる。

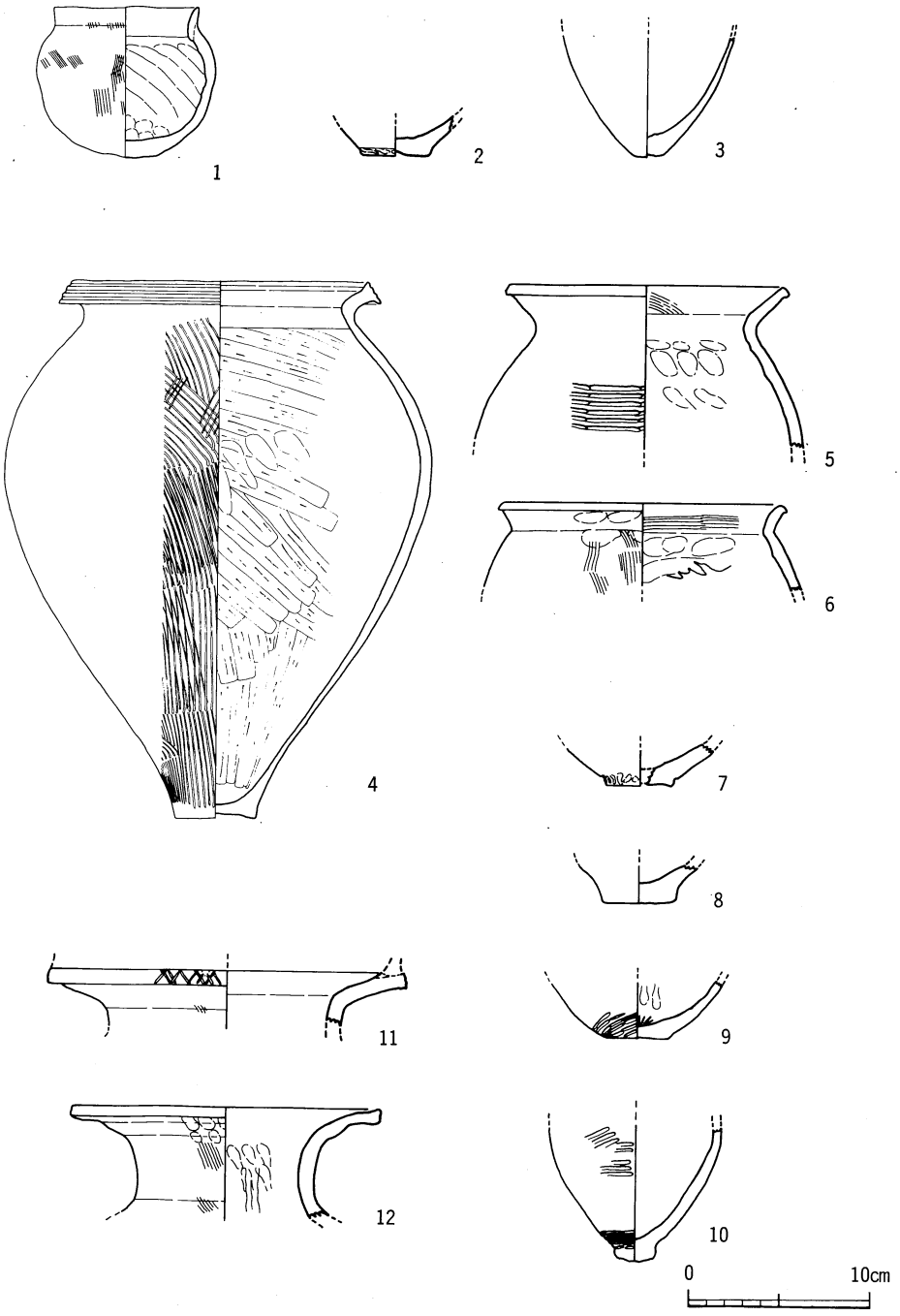
以上の調査結果から，下土居遺跡は弥生時代後期末頃を中心に営まれた集落跡であるという結論が得られそうである。今回の調査は，発掘面積等にも限りがあり決して十分なものとはいえなかったが，近くに万塚があることを考えあわせると，本遺跡の位置的な興味が湧いてくるものである。



第1図　トレンチ配置図

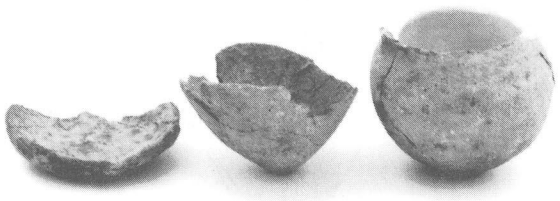


第2図　第1トレンチ平面実測図及び東壁土層図

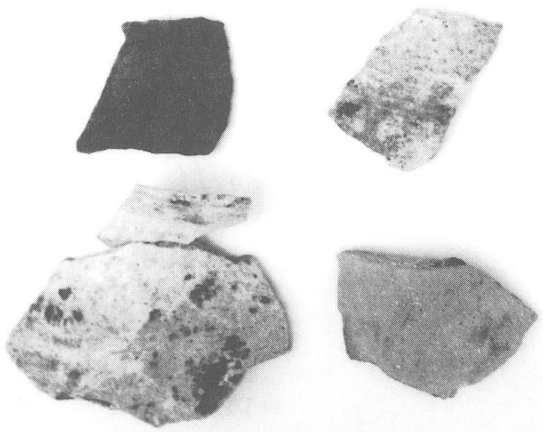


第3図　第1・2トレンチ付近出土遺物実測図

第４図　第２トレンチ南付近出土甕



第５図　第１トレンチＳＤ0102出土土器



第６図　第２トレンチ西付近出土甕

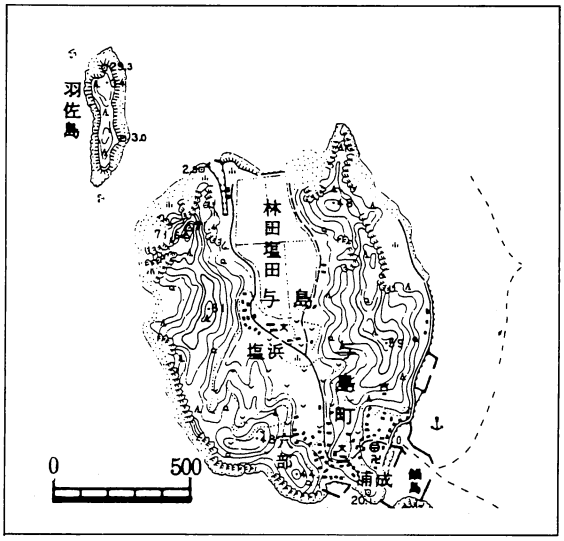
羽佐島（わさじま）遺跡（第２次発掘調査）

所在地　坂出市与島町羽佐島　　58．７．４～58．10．31

羽佐島遺跡は，坂出港から北へ８km，与島の北西0.2kmに位置する，備讃瀬戸の小さな無人島である羽佐島に所在する。

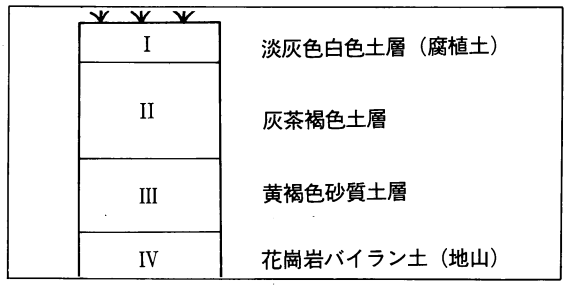
羽佐島遺跡では，昭和52年度に予備調査，昭和53年・54年度に第１次発掘調査が実施され，多数の遺物を出土している。

今回の調査では，発掘面積710m²から12,117点の遺物が出土しており，そのほとんどが旧石器時代の遺物である。



羽佐島位置図

土層は大きく分けて４層から成り，遺物は第１層から第３層の花崗岩風化土から出土しており，第４層は花崗岩バイラン土（地山）である。表土層からナイフ形石器が出土する一方で，第３層から土師器片が出土するというように，遺物の垂直分布は整然とせず，後世の人為的攪乱等を受けた後，二次的に移動・堆積したものと考えられる。

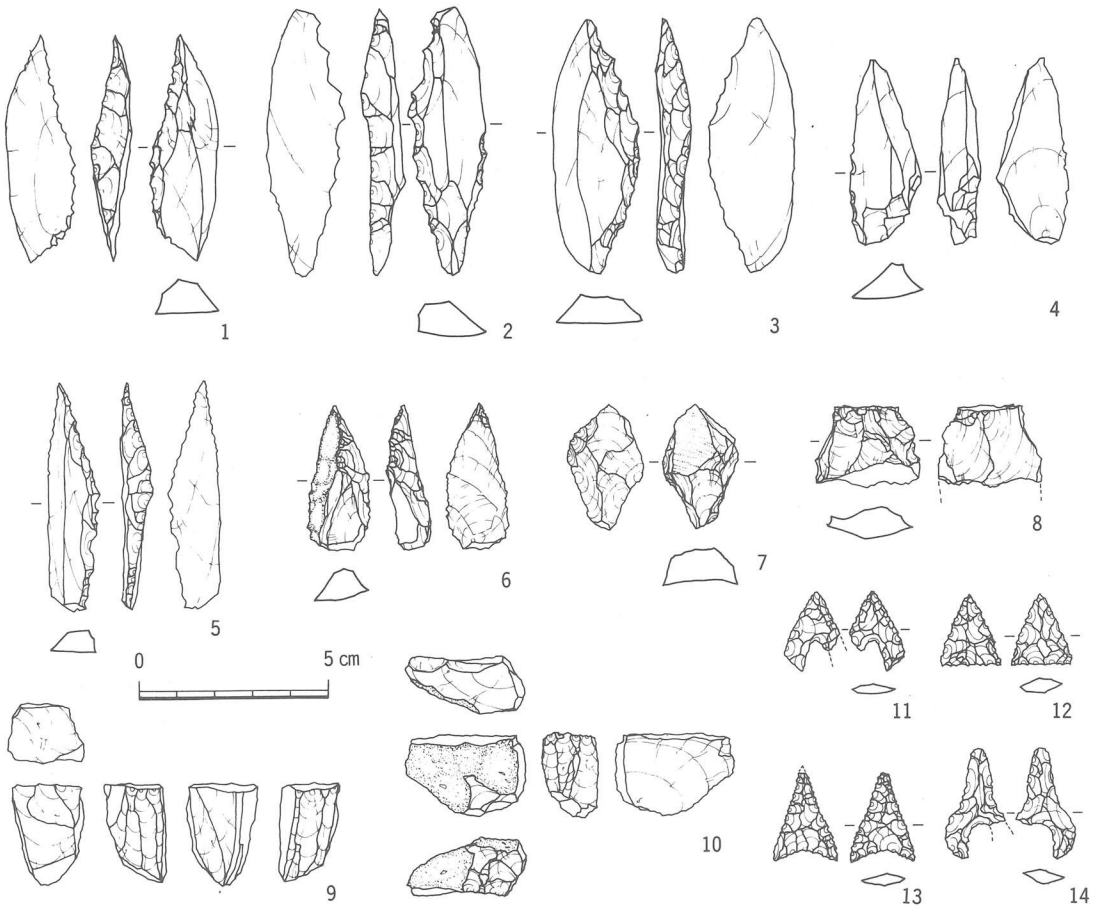


第１図　土層模式図

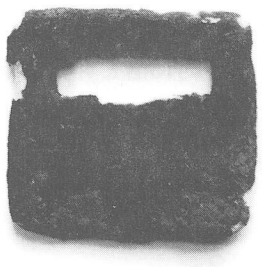
遺物はナイフ形石器・細石刃・細石核・尖頭器・削器・掻器・石鏃・石錐・叩き石などの石器を主として，青銅製帯金具（方巡タイプ）１点，滑石製勾玉１点，緑釉土器片１点，輸入磁器等，縄文土器から近・現代に至る陶磁器も出土している。

今回の調査においては，第１次調査に比べて細石核の出土率が約15倍と非常に高い。これは他の島嶼部の遺跡と比較しても，櫃石島の花見山遺跡に次ぐ高出土率である。また，ほとんどがサヌカイト製の石器のなかで，ハリ質安山岩製１点・黒曜石製１点・水晶製２点の計４点のナイフ形石器，ハリ質安山岩製石鏃１点，流紋岩製石鏃１点，チャート製尖頭器１点，流紋岩製翼状剝片とサヌカイト以外の石材を用いたものが出土している。

今回の調査結果から，羽佐島は全島にわたって旧石器時代の遺物を豊富に埋蔵しており，島の南部は北部に比べて細石器文化の影響を強く受け，サヌカイト以外の多様な石材の石器が活用されていることが分った。さらには，第１次調査における緑釉土器片・今回の帯金具・勾玉および緑釉土器片の出土から，羽佐島では航海にともなう祭祀が行われていたと考えられる。



第２図　羽佐島遺跡出土遺物実測図
１～８　ナイフ形石器（６は黒曜石製，７・８は水晶製）
９・10　細石核（ハリ質安山岩製）11～14　石鏃



第３図　青銅製帯金具

第４図　滑石製勾玉

岩黒島（小中学校移転及び市道建設に伴う調査）

所在地　坂出市与島町岩黒　　58．10．4～58．11．4

岩黒島は，坂出から海上10kmの北方にある坂出・児島間に並ぶ島の一つで，標高20m級の丘陵が東南から西に曲って東北に延びる馬蹄形をなし，面積約0.16k m²，周囲１．７kmの小さな島である。

備讃の島々と同様，花崗岩を基盤とするが，その北半分は黒色の閃緑岩を抱いた赤褐色粘土層からなる。

第１図　岩黒島調査地点及び地形図

小・中学校移転予定地である松原地区では，遺物（石器・石片）は地表下10cmから35cmのところに主として散布しており，その層位は堆積土とバイラン土第１層で，バイラン土第２層の上面でとどまり，当時の生活面はバイラン土第１層であったと考えられた。バイラン土第２層や粘土層の中に半月形の青灰色砂質層や黒色粘土が含まれることもあったが，その平面形は不規則で，旧石器の遺構とは考えられず，花崗閃緑岩の風化あるいは木の根の腐植と考えられた。

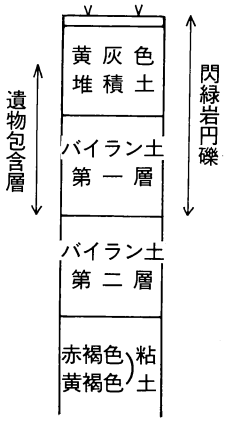
遺物は811点で，さきに香川県教育委員会が行った初田遺跡にくらべて多量であった。包含層は前記のように堆積土とバイラン土第１層で散乱あるいは累積する円礫の間隙に散布していたが，堆積土中では円礫下にもあって，この層の遺物は二次的なものと考えられたが，バイラン土層中のものはほぼ当初のままであると見られた。

遺物は縄文期とみられる土器片３点・石鏃３点および焼土塊のほかは旧石器に属する剝片・砕片・石核などサヌカイトを原石とするもので，その中には完形石器は見あたらず，縦長剝片・翼状剝片が数点あるのみで大部分が不定形な剝片・砕片である。

市道建設地では，No.５トレンチでのみ遺物の散布が確認できた。

遺物は第２層の黄褐色粘土層の東寄りに２ヶ所に集まる形で出土した。サヌカイト片は13点で風化・磨滅も少なく，この層がサヌカイト片の散布した時期の表層と考えられたが，散布面積は少範囲で広がりは考えられなかった。出土のサヌカイト片は石器形態の整わない剝片が多いが，細石刃と考えられるもの３点と削器片１点がある。

本概要は，香川県文化財保護協会坂出支部が作成した『岩黒島松原・北池地区発掘調査（概要）報告書』（昭和58年11月）・『岩黒島市道岩黒路線発掘調査概要報告書』（昭和59年３月）の内容を抜粋して作成した。



第２図　小・中学校予定地
土層模式図

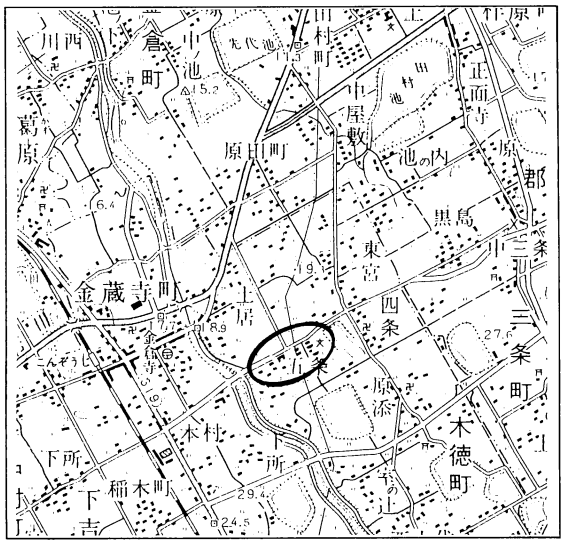
五　条　遺　跡

所在地　善通寺市原日町　　58．7．18～58．7．27

五条遺跡は善通寺市原田町に所在し，弥生時代前期末から中期初頭にかけての土器が出土する遺跡である。本遺跡は昭和34年に偶然発見されたものであり，出土した土器は３種類に分類されている。

土器は弥生時代の標式土器として有名であるが，遺跡の範囲などは不明のままである。

五条遺跡は丸亀平野のほぼ中央部に位置し，東の土器川・西の金庫川にはさまれた沖積平野の微高地上に位置する。標高は20～25ｍを計る。



五条遺跡位置図

周辺の弥生遺跡としては，多度津町三井遺跡・丸亀市中の池遺跡が前期に属する遺跡として有名である。中期から後期にかけては，善通寺市弘田川東岸にある旧練兵場跡遺跡が知られており，住居跡・壺棺なとが発見されている。

この五条遺跡付近に，国道319号線バイパスのルートが通ることとなった。このため五条遺跡の範囲を確認し，建設省との事前協議の資料を作成する必要が生じた。

香川県教育委員会は重要遺跡確認調査の一環として，五条遺跡の発掘調査を実施し，この状況に対応することとなった。調査は７月18日から27日までおこなわれ，調査面積は約36㎡である。

調査区は建設省の買収用地を借用することとし，地区内に３×３ｍのトレンチを４本設定し，遺構・遺物に変化がみられた場合にトレンチを拡張する調査方法を採用した。

調査区の土層は，４つのトレンチとも同様の土層序を示す。まず表土層が20～30cmほど堆積している。床土層がその次にあり20cmの厚さを計る。その下には50～70cmの砂質土層，さらに最下層には砂礫層が堆積している。砂礫層の完掘をしていないため，厚さは不明である。

遺構は皆無であった。また遺物は表土層・床土層から近世の磁器片が数点出土したのみで，以下の層は無遺物である。また期待された弥生土器は出土しなかった。

今回調査対象区となった地区は，金倉川の范濫原と考えられ，五条遺跡の範囲には入っていないと思われる。

なお，今回の調査区より東へ200m進んだ地区を，善通寺市教育委員会が調査した結果，やはり弥生土器は出土しなかった。

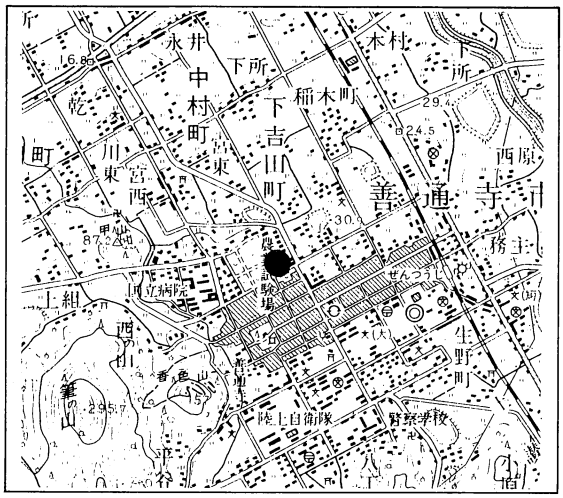
仲村廃寺

所在地　善通寺市善通寺町230

58．8．1～58．8．31(一次)
58．11．15～59．2．10(二次)

善通寺市善通寺町230番地に所在する市営駐車場は，法隆寺系の忍冬唐草文軒平瓦や単弁八葉蓮花文が出土しており，白鳳期から奈良時代前期にかけての寺院跡ではないかと言われてきた。しかし，寺院の実態は全く不明で，この遺跡は仲村廃寺とも伝導寺跡とも呼ばれていたにすぎない。

善通寺市教育委員会は，この遺跡の実態を解明するために，昭和58年８月１日から31日までと，11月15日から翌年の２月10日までの２回に分けて確認調査を実施した。調査面積は1200㎡である。



仲村廃寺位置図

市営駐車場にはアスファルトと後世の礫が約70cm乗っており，それを除去した後に発掘調査を開始した。

表土下90cmで第１遺構面を検出した。この遺構面は石組み（ＳＸ01）と，溝（SD03）より成っている。SX01は，南の部分が削平されていたために全長は確定できないが，現状で長さ７ｍを計る。石組みは溝になっており，幅50cm・深さ30cmになっている。このSX01はＮ８°Ｗ方向に軸が走っている。石材は川原石であり，これが３段ほど積まれ，底には石が敷かれていた。ただこの北端で，板状のサヌカイトが溝に落ち込んだ状態で出土したのが注目される。

SD03は東西に走る溝で，SX01と同時期につくられたものと考えてよい。

一次調査で出土した遺物は，忍冬唐草文軒平瓦片・須恵器片・弥生土器片などであり，いずれも磨滅が著しく良好な出土とは言えない。忍冬唐草は扁行であり，珠文帯忍冬文形式であろう。小片なので断定はできないが，善通寺旧伽藍出土の軒平瓦と同じ文様である。奈良時代前期に比定できる。

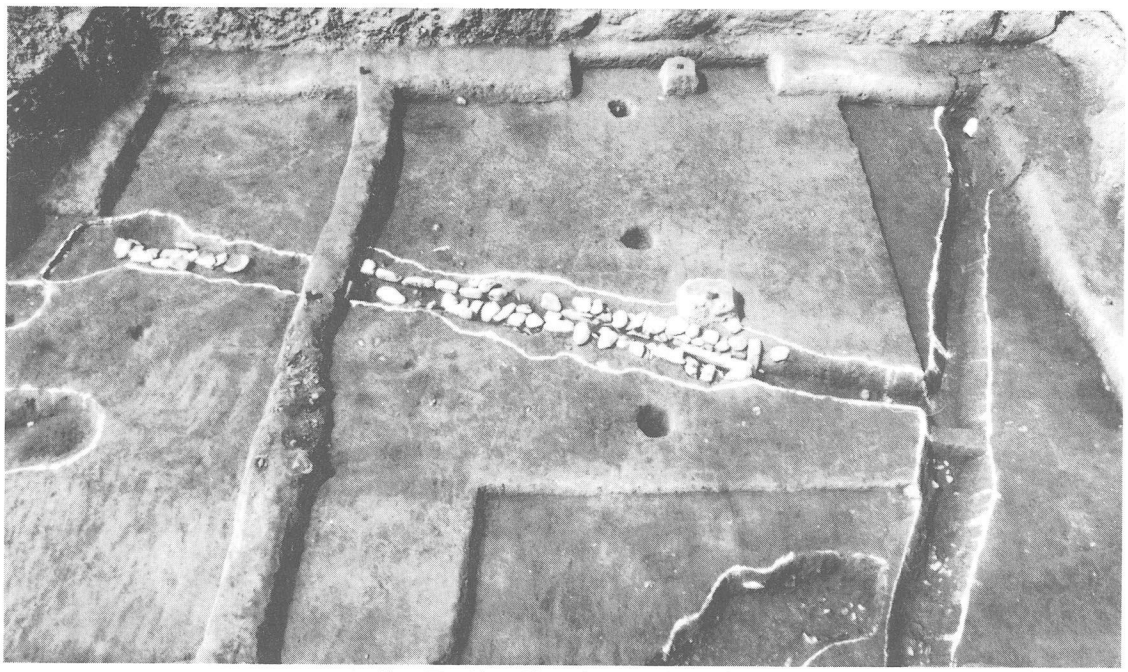
須恵器片は，壺・甕・杯・高杯などである。古墳時代後期からかなりの時期幅をもって出土している。

仲村廃寺の存在は，一次調査によっては明確にできなかった。このため二次調査が実施された訳である。この調査により，調査区の北端で多数の瓦片を伴う基壇状の高まりが検出され，この市営駐車場が仲村廃寺の跡であることが判明した。

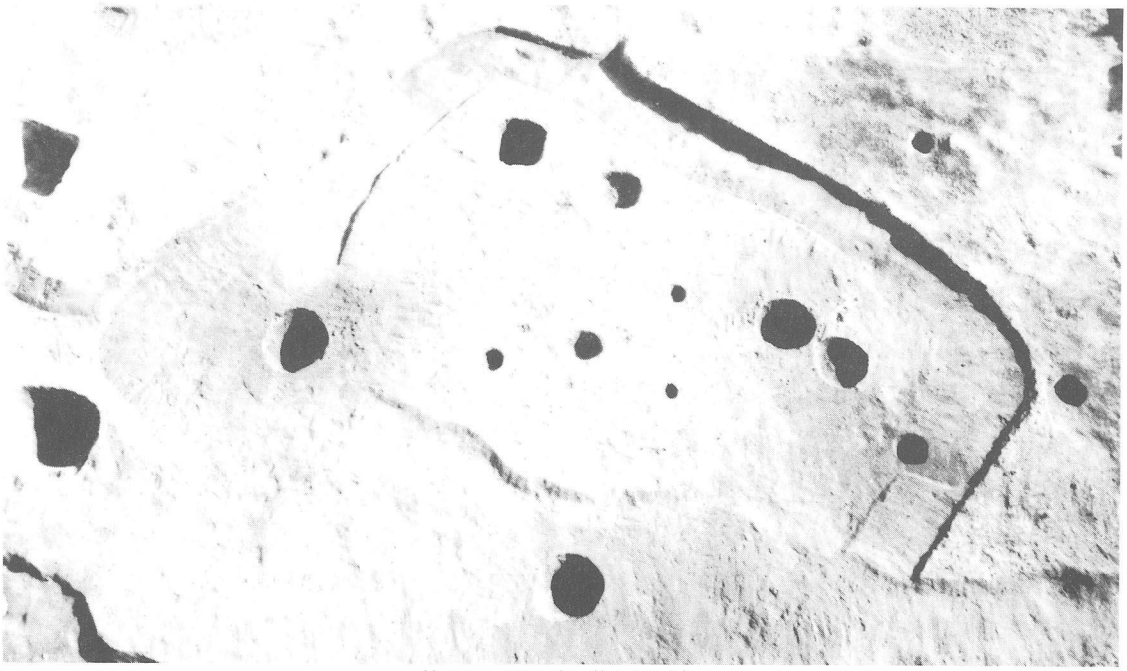
さらに二次調査では，弥生時代後期に比定できる隅丸方形の竪穴住居跡を検出した。このこ

とにより，この市営駐車場が，隣接する農業試験場の弥生遺跡と密接な関連を持つことが判明した。

なお，遺跡の詳細に報告については，善通寺教育委員会より近く報告書が刊行されるので，それを参照されたい。



第1図　遺　跡　全　景（西から）

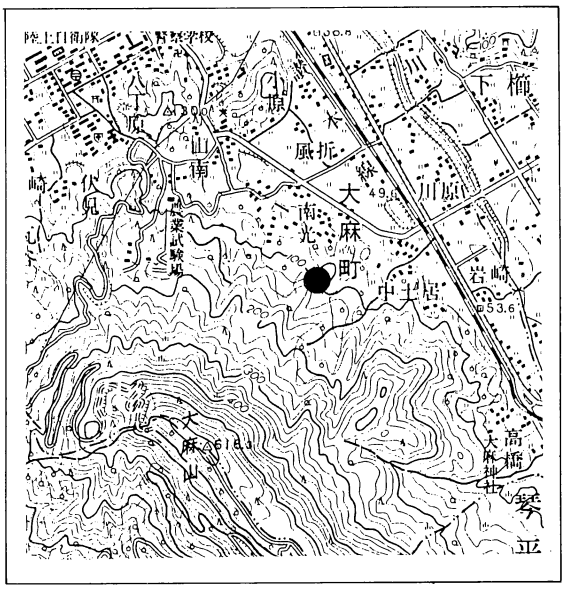


第2図　竪穴住居跡

谷田古墳

所在地　善通寺市大麻町1509　　58．10．17～58．11．10

谷田古墳は善通寺市大麻町1509番地に所在する。この付近で県営畑総事業による土木工事が行われ，多数の安山岩の塊石と土器片が発見された。58年９月上旬，県教委による試掘調査を実施した。その調査によりこの遺跡が竪穴式石室を主体部とする古墳であることが判明した。



谷田古墳位置図

以上の成果を踏まえ，県教委・市教委・県土地改良課の３者がこの遺跡の処置について協議を行った結果，遺跡としては貴重であるが事業が農業振興を促す重要なものであること，既に遺跡の西半分が破壊されてしまっていることなどを勘案して，記録保存もやむなしという結論がでた。

市教委はこの協議結果に基づき，ただちに教育長を団長とする谷田古墳発掘調査団を結成し発掘調査をおこなうこととなった。

調査は，58年10月17日から11月10日まで実施された。

古墳の所在する標高は97mを計る。既に墳丘の2/3ほどが亡失しているため完全な墳丘検出は不可能であった。残っていた北の墳丘残存部から推定し径10～11mの円墳としておく。

墳丘の基底部には，小児頭大から人頭大の大きさの安山岩が１段から２段めぐっていた。この石列は破壊された墳丘にも伸びていた可能性は強い。

墳丘は地山の傾斜に沿って堆積している。地山は南西から北西に向かって傾斜しているので，盛土は北に向かうほど厚く堆積している。さらに盛土は版築をしている。

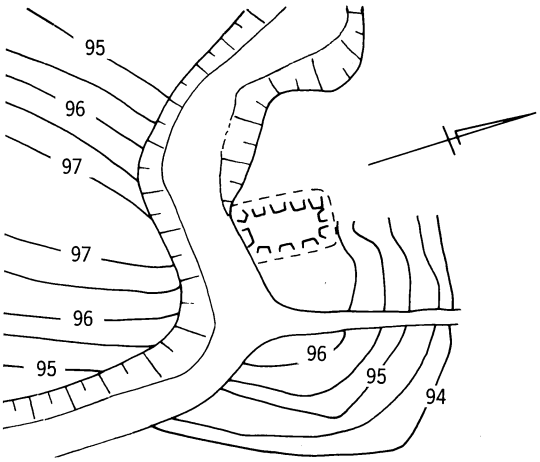
土器を埋めていた土坑と竪穴式石室の２つが遺構である。土坑は上方が削平されていたため底付近を検出した。径は34cmである。この土坑より土師器甕底部が出土した。

石室を作った墓坑は，長さ340cm・幅230cm・深さ80cmを現状では計る。石室は西半分か破壊されており，現状で長さ250cm・幅90cm・高さ70cmを計測している。天井石は認められなかった。天井石が元来開架されていなかったか抜かれたかは不明である。

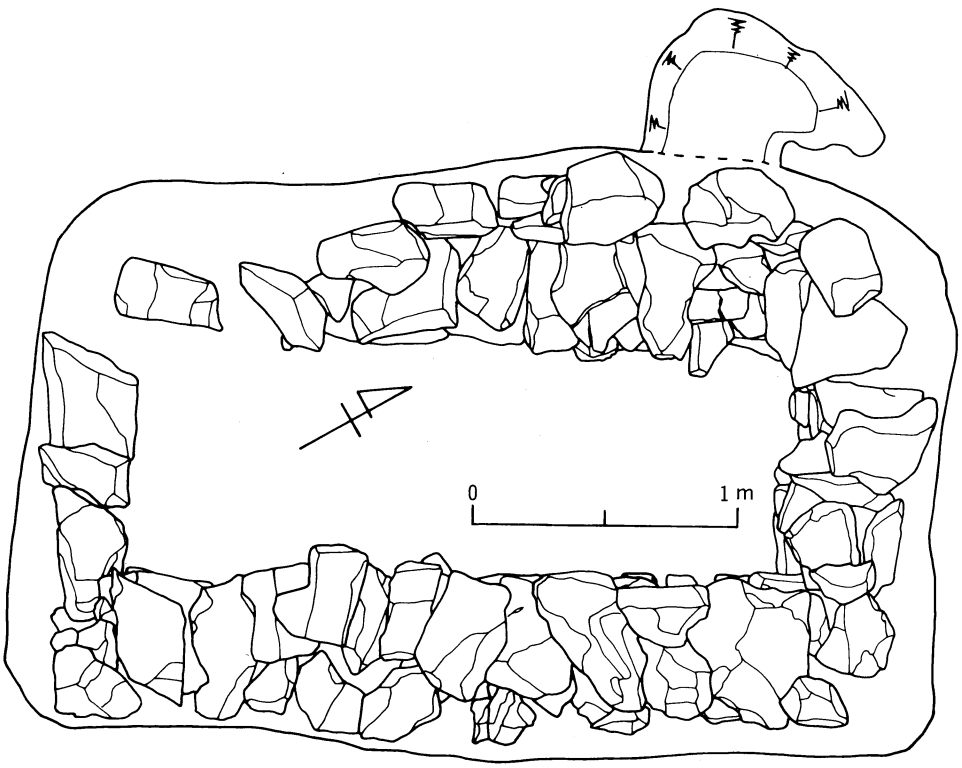
石材は安山岩の塊石を用いており，３～４段ほど内に揃えて積んでいる。墓拡と側壁の間には，同一の石で控え積みがなされている。石室西半分で持ち送り状の石積みが見られるが，土圧によって変化したものであろう。

床面は盗掘により大部分が失われ，形態は不明である。

谷田古墳は築造時期を4世紀前半代に求めることができよう。今後さらに周辺の調査が進めば，よりその精度の高さを求めることが可能となろう。

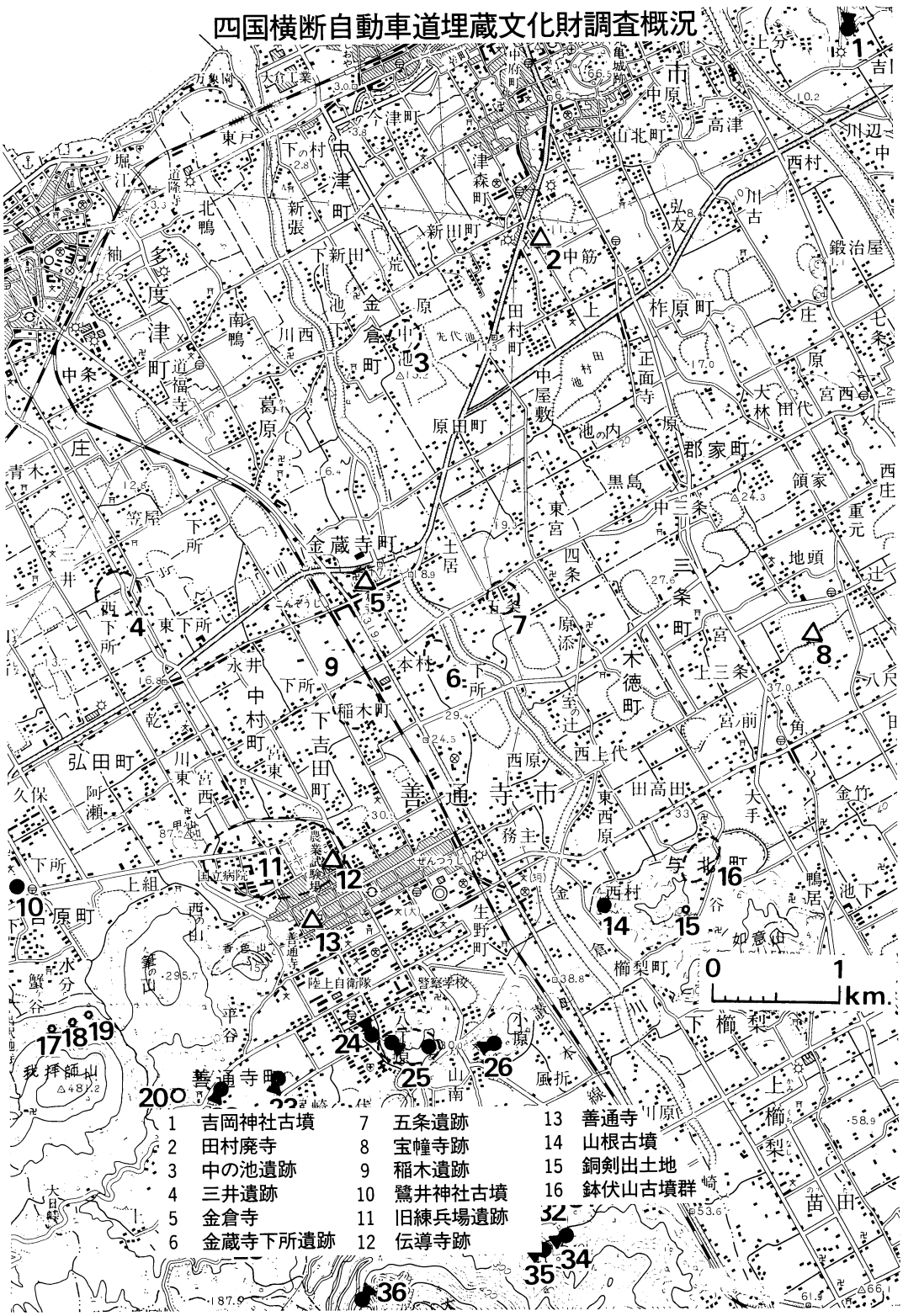


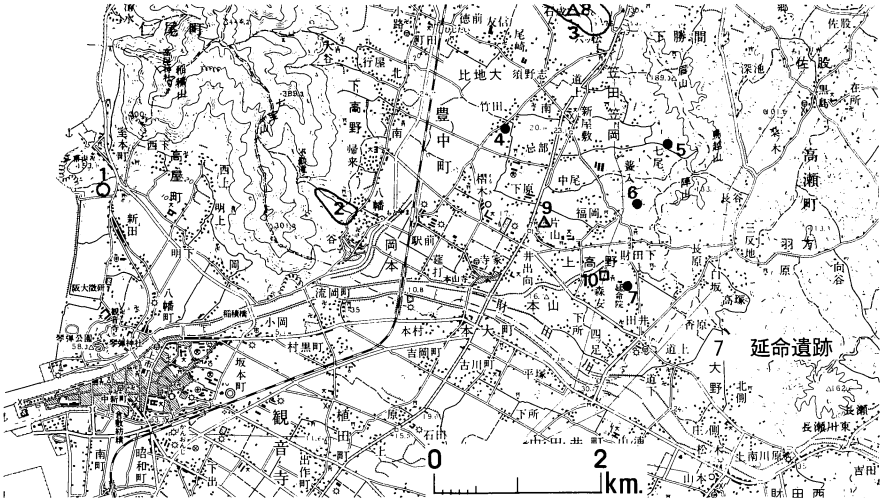
第1図　墳 丘 測 量 図



第2図　石 室 上 面

四国横断自動車道埋蔵文化財調査概況





昭和58年度　発掘調査概況

遺跡名	所在地	発掘期間	立地・環境	遺構	出土品
多度郡条里	善通寺市 金蔵寺町下所		微高地 (金倉川の西岸)	古代の方格地割(条里制)N 30°Wに走る　幅10m　深さ1.6m以上の溝 29棟以上の柱穴群 円形が5棟それ以外は方形の掘り方をもつ。	木製品（300点） 斎串・人形・馬形・船形・刀形・曲物・円面硯・鉄椀・黒色土器・瓦器・白磁・青磁
	善通寺市 稲木・下吉田町		平野部 水田畑地 (丸亀平野の西方)	古代の方格地割　N30°Wに走る溝，ピット群	須恵器　自然流木
稲木遺跡	善通寺市 稲木町		平野部 (水田・畑)	弥生時代前期の溝 幅6m　深さ1.3m	縄文土器　弥生土器　石包丁
四ッ塚古墳群	豊中町 笠田笠岡		眉山から南に派生する尾根丘陵	円墳 横穴式石室	須恵器
財田古墳	豊中町 上高野		陣山から派生する尾根の低丘陵	径13mの円墳 横穴式石室	須恵器，土師器，鉄器(釘・斧) 装身具(銀環・管玉) 弥生土器，サヌカイト片，石鏃
延命遺跡 城ノ岡地区	豊中町 上高野		独立低丘陵の西北端	土坑3　ピット90個	土師器・須恵器・瓦器・染付・陶器・輸入磁器・瓦片・すり鉢

発掘面積

発掘場所	当初契約	第1回変更	第2回変更
多度郡条里(金蔵寺町～稲木・下吉田町)	8,700㎡	13,700㎡	13,700㎡
稲木遺跡	300	300	300
四ツ塚古墳群	1,000	1,000	200
財田古墳群	1,000	1,000	1,000
延命遺跡	1,000	5,000	4,000
計	12,000	21,000	19,200
経費	93,000千円	142,000千円	141,000千円

金蔵寺下所遺跡

所在地　善通寺市金蔵寺町字下所　　58．4．1～59．3．31

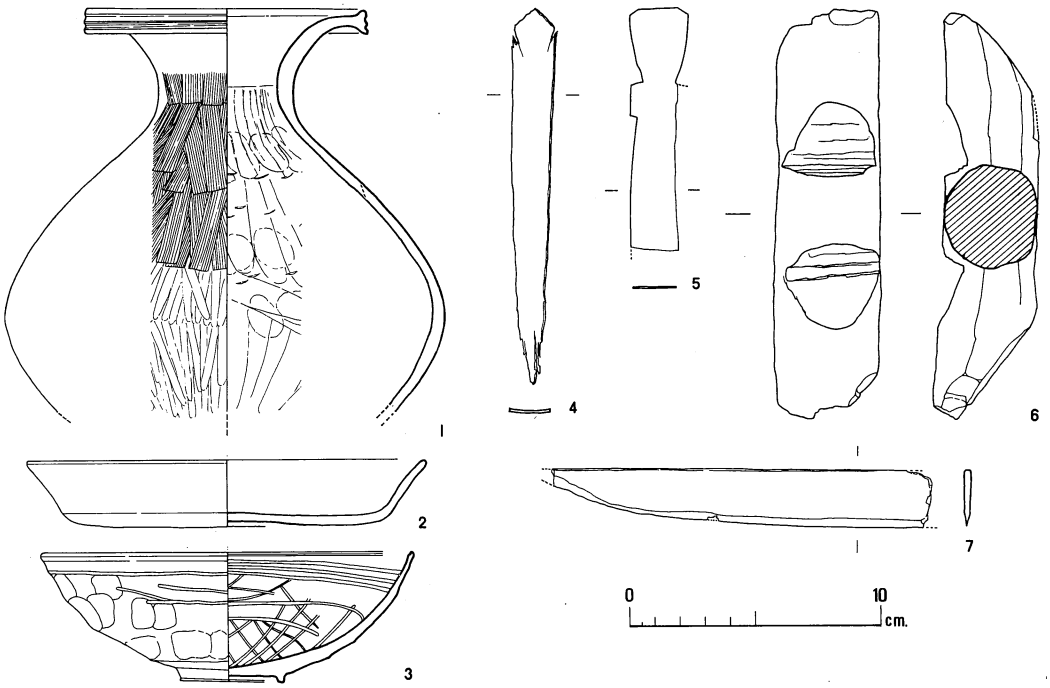
金蔵寺下所遺跡は，善通寺市金蔵寺町字下所に所在し，丸亀平野西部を流れる金倉川の西岸にある。当遺跡の発掘調査は，四国横断道建設に伴うものであり，昭和58年2月10日から3月30日まで試掘調査を行い，4月1日より本調査を開始した。試掘調査の結果と現地形より約17000㎡を調査対象地域として確定した。今年度は，そのうちの8000㎡の調査を終えた。

現在検出している遺構は，弥生時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代にわたり，複合遺跡の様相を呈する。

弥生時代の遺構としては落ち込み状遺構を約40mにわたり検出した。おそらく溝状をなすと思われるが現地形との関係で完掘できなかった。出土している土器（第1図1）より弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

奈良時代の遺構としては，建物跡，溝，自然河川を検出している。建物跡はいずれも方形の掘り方の柱穴を持つものであり約20棟を数える。大きさは1×4間・2×2間，2×3間，3×3間とさまざまであるが，規模は小さい。そのうち数棟は総柱をもつ。

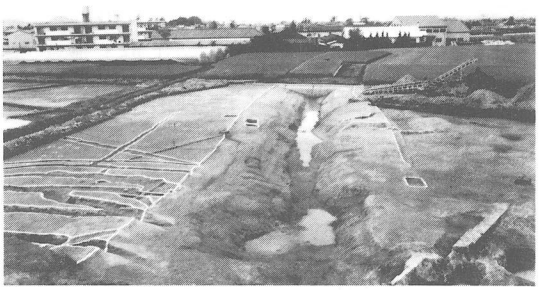
自然河川は，調査区の南西部において約40mにわたって検出している。最大幅は約15m，最深部は3mを越える。北岸は安定した粘土であるが南岸は礫である。断面の土層より判断すると，この河川の流路は一定ではなく，増水，氾濫などにより数回にわたり流路が変化している



第1図　出土遺物実測図

と思われる。河川の下層部には，黒灰色をした粘質土が厚さ約0.3～1.5mの範囲で堆積している。この粘土層より多数の遺物が出土した，土師器（壺・甕・皿），須恵器・甕・椀・鉄鉢），木製品（斎串・曲物・人形・船形・刀形・馬形），漁具（蛸壺・土錘），獣骨等が代表的なものである。この中で注目すべき遺物は，土師器皿と斎串等の祭祀遺物であろう。土師器皿（第1図2）は口径16cm・器高2.8cmを測るもので器壁内外面に赤色顔料を塗布している。これ以外にも赤色顔料を塗布した土師器片が数点出土している。また木製品の総数は約300点におよぶがそのうち斎串（第1図4）木製模造品，の祭祀遺物が半分以上を占める。斎串の数が最も多く100点をはるかにこえる。斎串以外にも人形(5)・刀形(7)・馬形・船形(6)の出土より自然河川の北岸より広がる平坦地は何らかの祭礼が行われていた場所であることが想定される。

平安時代の遺構としては，溝が検出された。幅約10m，深さ約2mの規模をもち断面形はなだらかなV字形を呈す溝である。約60mの長さにわたって検出している。この溝の最下層の粘土層より瓦器椀(3)2点，斎串1点を出土した。瓦器椀は共に黒くいぶし焼きされた土器であり器壁内外面に暗文をとどめる。おそらく畿内で作製されたものと思われる。おおむね12C初頭頃を中心とした時期が想定できる。この溝は調査対象地域外にも流れをもつために全様は明らかにできない。また，人為的な溝であるという以外には，その性格は不明とせざるを得ない。



第2図　SD8301全景

鎌倉時代以降の遺構としては，円形の掘り方を持つ建物跡・土壙墓を検出した。

本年度の調査は条里制遺構を意識して開始した。一年間の調査を終え，出土遺構・遺物等より判断して，今後調査の視点を再考する必要があるように思われる。

第3図 土師器椀（SD8301）

第4図　瓦　器　椀（SD8301）

稲木遺跡

所在地　善通寺市下吉田町　　58．5．6～58．5．20

善通寺市稲木遺跡は，弥生時代の土器や土師器の出土地として知られていた。「善通寺市史」は縄文時代の土器の出土も紹介している。近くに，旧練兵場跡・甲山・中村・三井等の弥生時代の周知の遺跡がある。またこの一帯には，条里制に基づくと推定される古代の方画地割が現地形に遺存している。稲木町，下吉田町は，古代の「多度郡良田郷」の一角である。

調査対象区は，「善通寺市史」にいう上記稲木遺跡の範囲の北端部にあたり，国道319号線の西の稲木町下川原・西角，下吉田町本村東・下所東・下所中・下所西である。丸亀平野の西方に位置し，標高はおおむね20m強で，全体に南から北へゆるやかに傾斜している。

調査は6月29日より試掘を始め，10月12日から本調査に移った。58年度の発掘面積は合計6000m²である。

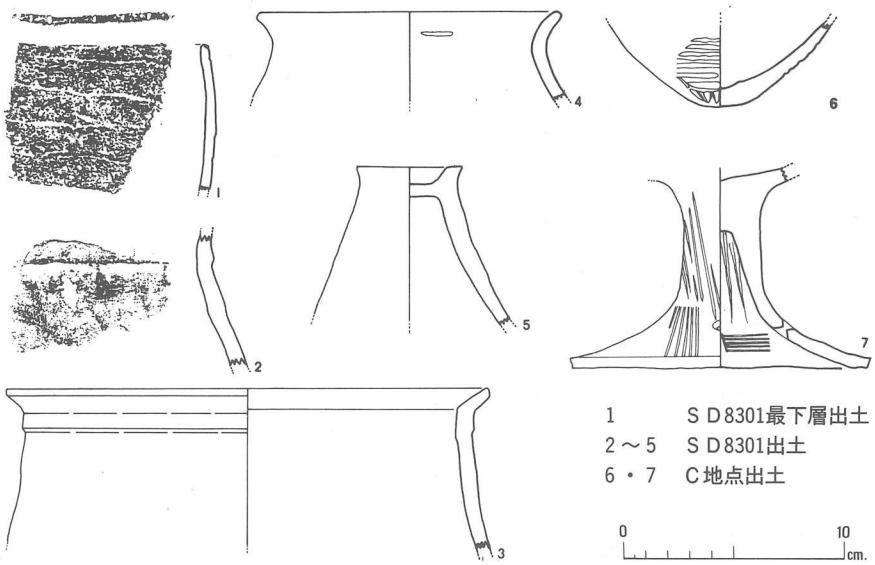
検出された主な遺構は，ピット群と溝状遺構である。

A地点で475個のピット群を検出した。黄色粘土（地山）とこげ茶色粘質土に掘り込まれており，形状に多少の差はあるものの，概して天端の径・深さとも20cm強の丸底である。淡灰色粘質土の埋土からは，磨耗のはげしい土師器片が4点出土したのみで，時代検討はできない。おおまかな方向性が一部にみられるが，ピット群の性格はまだ判明していない。

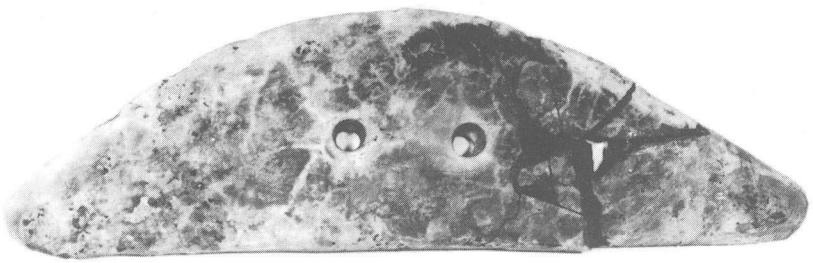
溝状遺構は2種類ある。1つはA地点のSD8301・8412であり，南北方向に流れる。それにT状に分岐（合流）して東に延びるSD8419もある。こげ茶・黒色粘質土の埋土に弥生時代前期，最下層の青灰色粘質土から縄文時代晩期の土器が出土しており，弥生時代前期前半を中心とした時期に掘削されたと思われる。近くにこれに伴う別な遺構は検出されず，まだ性格は判明しない。2つはB地点のSD8307であり，N-30°-Wの方位を示す。SD8307は，試掘で長さ6m，その10m南で8mの長さを検出したのみで，本調査を残している。

SD8301とSD8419の最下層より，縄文時代晩期の土器片が出土した。その上層の埋土からは弥生時代前期の土器が出土した。SD8412の埋土からは半月形外彎刃の磨製石包丁が出土した。国鉄土讃線東のC地点からは，弥生時代後期後半を中心とした時代の土器が多量に出土しており，次年度も発掘を継続する。小形丸底壺や製塩土器の脚部も出土している。

調査対象区全域からは，弥生時代の石器・須恵器・土師器が広範に出土する。弥生時代の土器は出土地点が限られる。解明しなければならない多くの課題を生み出しつつ，継続して調査中である。



第1図　土器実測図



第2図　磨製石庖丁

第3図　ピット群

第4図　SD8301・04・05

財田古墳群

所在地　三豊郡豊中町上高野　　58．9．26～58．11．30

財田古墳群は三豊郡豊中町上高野に所在する。かつては古墳が4基所在したらしいが，現在では正確な位置や内容については不明となっている。今回調査対象となった地区は東西に並ぶ2本の尾根で総面積は52,000㎡である。トレンチを13ヶ所に設定して発掘を進め，発掘総面積は1,900㎡で，その結果古墳一基を検出した。

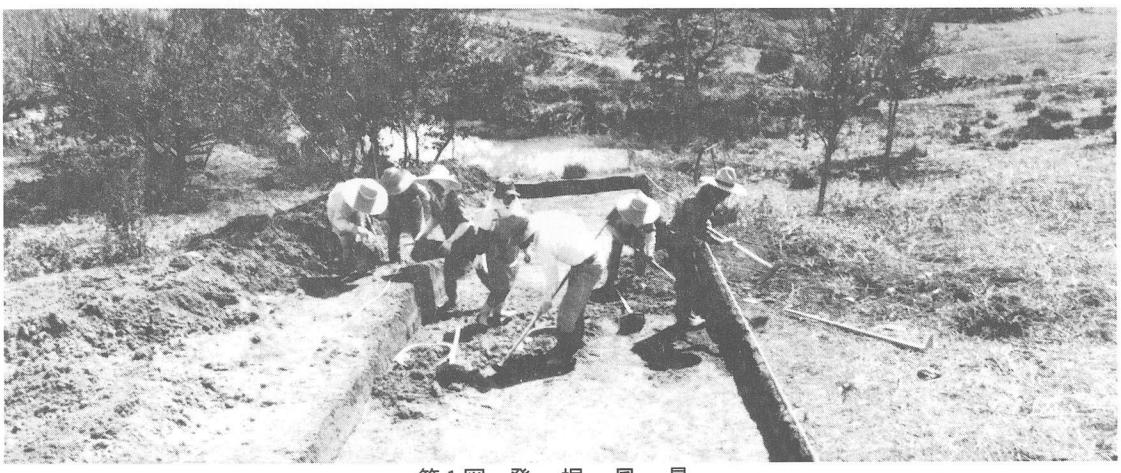
東尾根中ほどの標高43mの頂部で古墳一基を検出した。墳丘は開墾のためほとんどが削平されており，地山を成形した部分が高さ60～80m残存しているのみである。墳丘北西部に周溝状のものが残っており，大きさは上幅1.6m，深さ0.4mである。この周溝から推定すると，墳丘規模は径13mぐらいであったと思われる。

石室は横穴式石室であったと思われるが，石はすべて除去されていた。床には玉砂利が厚さ5～10cm敷かれており，この礫床の幅や長さ，また側壁石の抜き取り穴から復原すると，玄室長4.5m，幅1.1m，羨道長3.5m，幅0.9mと推定される。

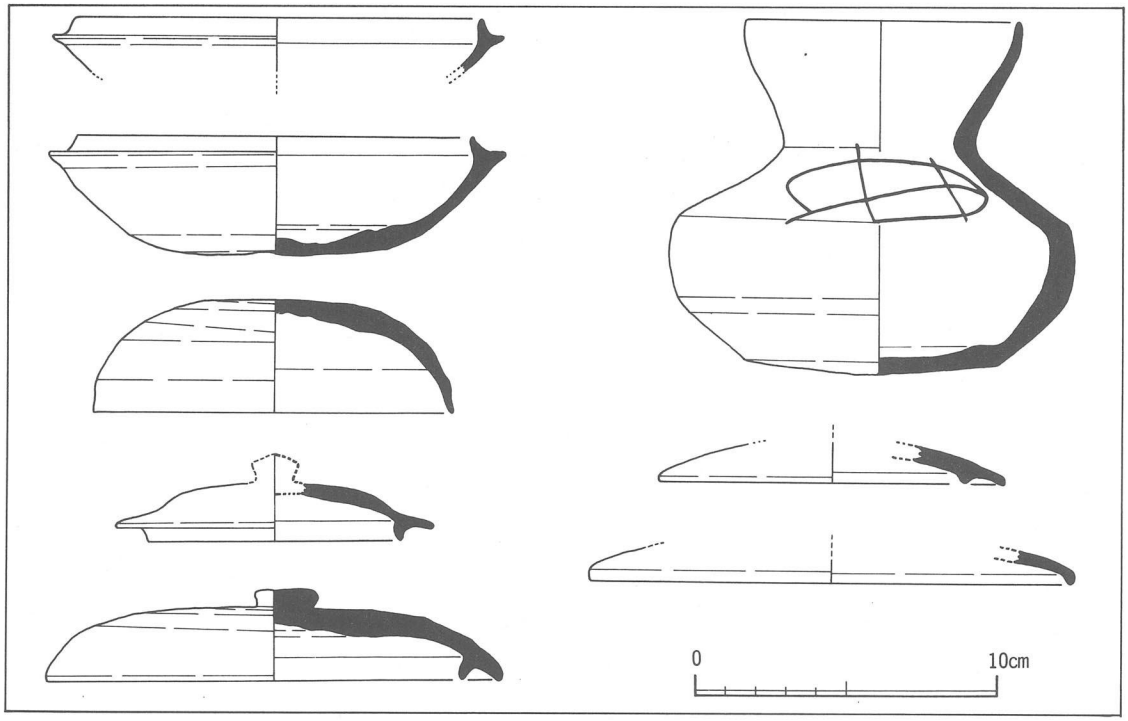
古墳の調査で出土した遺物は次のとおりである。須恵器（杯蓋・杯身・高杯・甕・壺・平瓶・提瓶），土師器（高杯・壺），鉄釘，鉄斧，耳環，管玉，弥生土器，サヌカイト。

須恵器・土師器類の大半は墳丘外の南西部からまとまって出土した。層位や位置からみて，開墾時に放棄されたものだろう。石室内からは鉄斧・鉄釘・耳環が出土したが，原位置かどうかはわからない。

本墳は出土した須恵器からみて6世紀末に築造されたと思われる。その後追葬に何回も利用されたらしく，7世紀末までの各時期の須恵器が出土している。石室内に礫床下には平たい割石が敷かれており，注意をひく構造である。



第1図　発　掘　風　景



第2図　出土須恵器実測図

第3図　石　室　床　面

森 1 ～ 5 号塚

所在地　三豊郡豊中町上高野2632～35　　59．1．11～

森1～5号塚は，横断道建設予定地内にあり延命遺跡の調査と併行して行われた。延命遺跡とは宮川をはさんで北方約150mの所に位置し，水田の畦畔上に5基並んでいる。

調査は，昭和59年1月11日から開始した。5号塚は3月15日に終了し1～4号塚は調査中である。

森五号塚は，現状で一辺4～5m，高さ65cmほどの隅丸三角形状をしたもので雑多な河原石を集積していた。

石を取り除くと，長さ170cm，幅95cm，深さ40cmの墓壙を検出した。主軸方向は，真北に対して81.5°東偏している。この墓壙は，側壁に河原石を配し，底には厚さ3cm前後の扁平な河原石を敷きつめていた。

本塚は，地山の上に現状で30cmぐらいの盛り土をして築かれている。土層で確認すると，この盛り土は，東西3.9m，南北4.6mで隅丸方形状に盛られている。しかし，現在の耕作土の直下でもあり削られている可能性が強く，塚の範囲は確定しにくい。

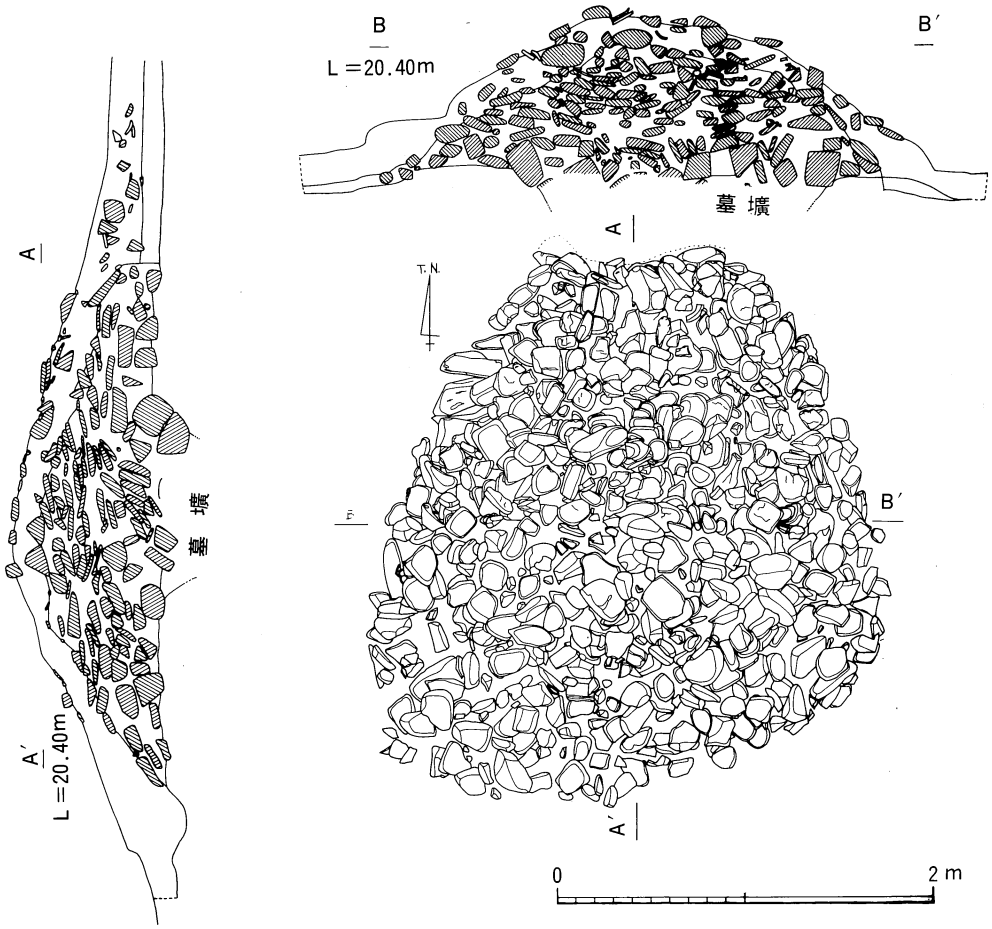
墓壙内部からは，鉄釘17本が出土した。その遺存状態から長さ96～98cm，幅55cmの規模の木棺が埋納されていたものと思われる。

副葬品として刀子1点が底石の上から検出された。また墓壙の上面からは，青磁椀がほぼ完全な形で検出された。この椀は，口径16.5cm，底径5.5cm，高さ6.9cmを計り，外面体部に鎬蓮弁の文様をもっており，墓壙内から移されたものと思われる。

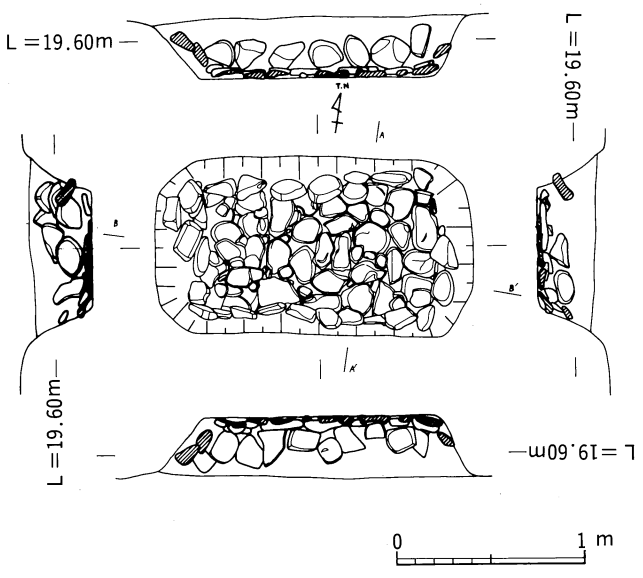
森5号塚は，綾南町西村遺跡の土壙墓の類例から墓と考えられる。築造時期は，遺物から13世紀頃と思われる。石積みについては，最下層の石は，比較的大きくまとまっていたが，上部の石は雑多で平面的にも断面的にも規則性がなく面を構成していない。また墓壙の中にも石が乱雑に落ち込んでいた。このような状況から考えて，本塚は築造後盗掘をうけた際，墓壙内部にあった青磁椀が移され，石が積み直されたものと考えられる。

中世墓に甕が伴う例は，西村遺跡で3例ほど知られているが，本塚は破片数が多く，6種類ぐらいの破片が認められる。また南西部盛り土直上に集中箇所があり，これらの意味については，今後の検討が必要である。

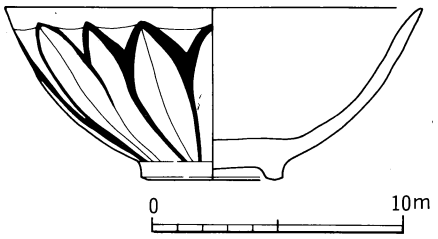
香川県内では，中世墳墓の調査例はまだ少なく，今後の調査の進展に期待したい。



第1図　森5号塚平・断面実測図



第2図　森5号塚墓壙 平・断面実測図



第3図　森5号塚出土青磁椀実測図

延　命　遺　跡

所在地　三豊郡豊中町上高野大地837－1他　　58．11．28～59．3．31

延命遺跡は，三豊郡豊中町上高野大地に所在し，延命の丘と呼称される独立低丘陵の西北端の平坦部に位置する。古来よりこの地は〝城岡（じょのか）〟と呼ばれている，延命遺跡の調査は昭和58年11月25日に開始され，現在も継続中である。調査対象面積は，10300㎡で今年度実掘面積は2500㎡で，次年度調査面積は，2300㎡の予定である。

調査区は独立低丘陵の上下に設定した。

下段の調査区からは土坑・ピット群が検出されたが，砂層に掘り込まれた遺構であり，遺物もほとんど出土していない。

上段は約4,000㎡の広がりがあり，現在まで南東部650㎡の調査が終了した。調査区全域現地表下30cm前後で鎌倉時代の遺構面を検出した。検出した遺構は，土坑・ピット群・溝などである。これらの遺構は2時期になると思われ，古い時期の遺構面は，ピット群・細長い土坑から構成されている。新しい時期のものは，溝・ピット群・集石土坑から構成されている。2時期の遺構群の遺物構成には差異が認められ，現在詳しい検討を行っている。

調査区南部で弥生時代の溝を検出した。この溝は，地形的に高い部分で検出された地山に掘り込まれており，鎌倉時代の遺構下に遺跡が広がる可能性がある。これについては次年度調査を実施する予定である。

検出された鎌倉時代の遺構からは，土師器（土鍋・小皿・杯・有脚付小皿），須恵器（甕・こね鉢）の瓦器，輸入磁器，銅銭，鉄製品，瓦，五輪塔などが出土している。

特に注目したいのは，ヘラ切りと糸切り手法の小皿である。どちらの手法の小皿にも口縁部が外反するもの，直線的に外方に延びるものがある。しかし胎土に関しては，明確にヘラ切りは胎土が良く，糸切りは砂粒を多く含み胎土が悪いということがわかる。また県内でも類例の少ない有脚付小皿も出土している。土師器小皿と共伴した瓦器は，粗略化の傾向が顕著であり畿内の瓦器が，在地の瓦器であるかは，今後検討を要する。

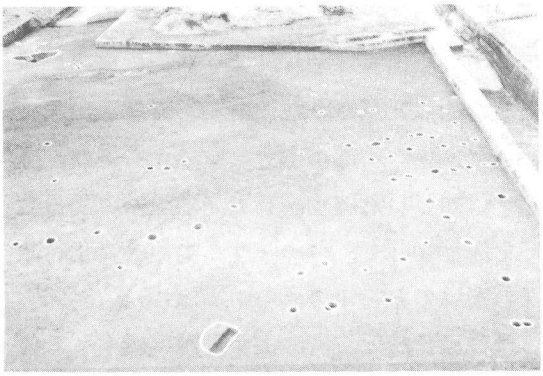
また弥生時代の溝からは後期の土器が出土している。

本年度調査により，延命遺跡は鎌倉時代を中心とした遺跡と思われ，五輪塔や瓦が見られる点から宗教関係の遺跡の可能性も考えられる。またその下に弥生時代の生活面があるものと思われる。

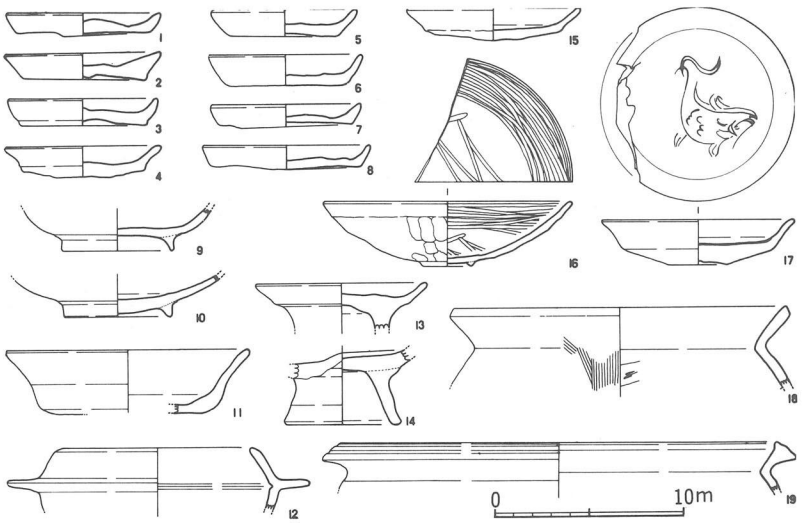
延命遺跡の調査は，現在継続中であるが，県内で不明な点が多かった中世にとって，明るい資料が多量に出土した。特に土師器小皿・杯，瓦器，こね鉢，有脚付小皿の一括資料は，土師器小皿におけるヘラ切りから糸切り手法への転換期及び共伴期を13世紀中葉まで逆のぼらせることになった。また糸切り手法に砂粒を多く含む胎土の悪い製品が多い。このような底部切り離し手法の違いが胎土の違いとどういう関係にあるのか，またその違いは製作工人の違いに起

因するものかは今後の課題である。

第1図　調 査 風 景



第2図　ピ ッ ト 群



1～8　土師器小皿　9～11　土師器杯　12　土釜　13・14　有脚付小皿
15　瓦器小皿　16　瓦器椀　17　輸入磁器　18・19　弥生土器

第3図　　出 土 遺 物 実 測 図

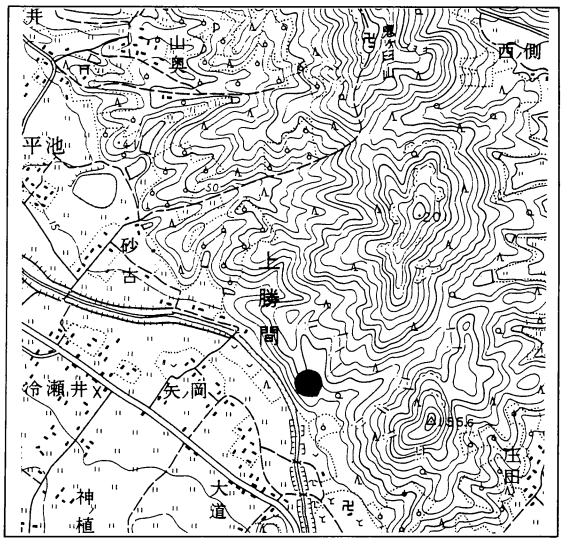
矢の岡石棺墓

所在地　三豊郡高瀬町下勝間2397番地　　58．7．14～58．7．28

矢の岡石棺墓は昭和58年4月，山火事の後の植林中に発見された遺跡である。その際，石釧と人骨の一部が出土したこともあり，保存を目的とした確認調査を高瀬町教育委員会が主体となって，香川県教育委員会文化行政課の指導のもとで猛暑の中実施した。

通称鬼ヶ臼山の南の頂から南へ派生する痩せた尾根の突端に立地する本遺跡からは眼下に上勝間地区一円を一望にでき，被葬者の生活基盤が高瀬川西岸の一帯であったことが推測するに易い。

調査は，(1)墳丘の有無，(2)石棺の構造，(3)石棺内の精査の3つの観点で実施した。



矢の岡石棺墓位置図

現地は痩せた尾根の突端であり，東西の斜面は急勾配であるため，土砂の流失が著しい。南北10.5m東西6mのトレンチの壁面からは人の手が加えられた痕跡は認められず，遺物も出土しなかった。特に東西トレンチでは表土直下に黄灰色の砂質土(いわゆる花崗岩のバイラン土)を検出するなど，土砂の著しい流失を物語っている。土層の観察からは墳丘を意識した人為的な工作は見当らなかった。

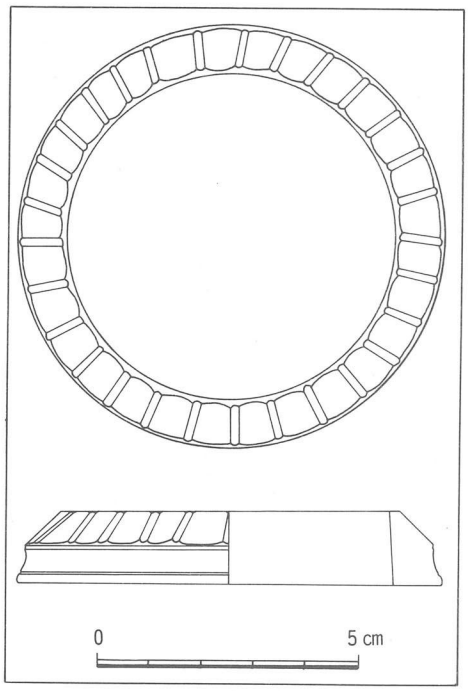
石棺は，厚さ10cm～25cm程の内面を加工したと思われる花崗岩の板石が8枚使用されていた。頭部（北）の方が足部の方より大きな石を利用していた。また長側壁を挟むように短側壁が据えられており，短側壁はそれぞれ1枚の石を使用していた。頭部幅が足部幅よりも大きく，土圧の影響かやや上部が内傾していた。(内法160cm×46cm（頭部幅)) 蓋石は4枚の板石を使用していた。発見時に両端の2枚が移動されたため旧態は不明であるが，側面，上面には一部粘土が残存していることから全体を粘土で被っていたものと想像できる。床にも粘土が貼られていた。

石棺内には外部より多量の土砂が流入していたが，これらは粒子の粗いものであり，発見時におけるものと思われる。

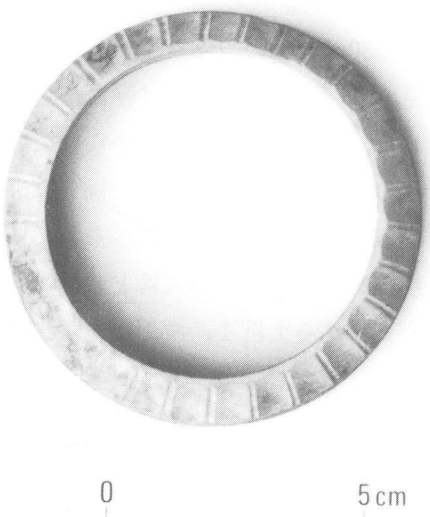
石棺内の精査中には遺物は僅かに流れ込みと思われる弥生土器片2点のみしか出土しなかった。したがって出土遺物は石釧1点と人骨（頭蓋骨の上部と破片数点）のみということになる。人骨は香川県警察本部鑑識課に鑑定を依頼した結果，成人の男性らしいということがわかった。石釧は香川県では例の少ない遺物で，出土例は本遺物で5件目で，県内では西限を画するもの

である。材質は質の悪い碧玉を使用している。

出土遺物が石釧１点のみで時期を決定する根拠は乏しいが，石釧の出土例からみて５世紀初頭に築造時期をおくのが適当であろう。



第１図　石釧実測図

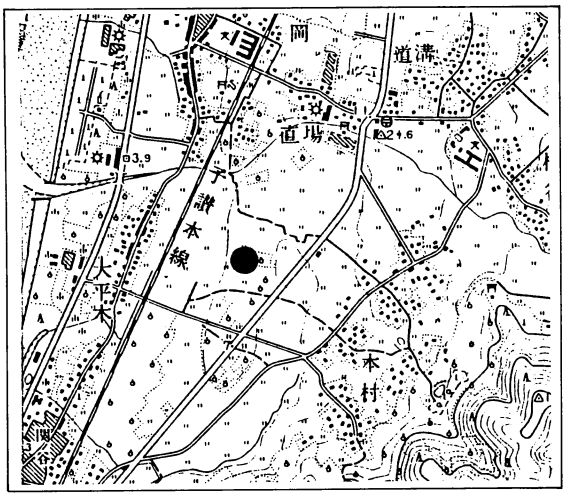


第２図　石　　釧

大　木　塚

所在地　　三豊郡豊浜町大和田乙1325

58．10．22～24
59．1．9～3．9



大木塚位置図

大木塚は，豊浜町の中央部に位置しており，地形的には海岸地帯から次第に高くなっている微高地の先端で，海が見える。

「西讃府志」によると本塚の周辺で数基の塚の存在が述べられているが，現在残っているのは大木塚だけである。

豊浜町は昭和59年度に大木塚を含め，その周辺地区で圃場整備事業を実施する計画を立てた。そのため豊浜町教育委員会は保存・撤去の判断をするために，確認調査を実施することになった。発掘調査は豊浜町教育委員会が主体となり，県教委が指導にあたった。調査は昭和58年10月22日から３日間と，59年１月９日からの都合２回実施された。

大木塚は，古墳の可能性もあったため，盛土を墳丘と考えてトレンチを入れ，主体部を検出することになった。しかし予想された横穴式石室など古墳時代の埋葬施設は発見されなかった。しかし１辺５ｍに方形プランをもち，高さ60cmを計る石積みの基壇を検出した。また，石積みと盛土とは直接関係ないことが判明した。

石積みは内法約480cm・外法約530～40cmの内側を意識して方形に石を配した石列の中に，無雑作に石を積み上げたように見える。石積みの石材は緑泥片岩の平石や川原石である。高さは60cmで，頂部は平坦になっており，緑泥辺岩が敷きつめられていた。

石積みの石を除去すると，その下より内法約220cm・外法約260cmの方形プランの石組を２つ検出した。一部に崩れがみられるが，内を意識して並べられている。二段の石積みで30cmの高さを計る。石と石の間には，崩壊を防ぐためか拳大ほどの詰め石をしている。

石積みの下では，石組みの中央部から土坑１，南部から焼土面を伴う粘土塊１を検出した。土坑は直径1.6m・深さ32cmを計る。土坑内には玉砂利・黒褐色砂質土が充満していた。出土した遺物は青磁椀１点・白磁皿３点である。

粘土塊については不明な点が多く，今後の調査例の増加を持ちたい。

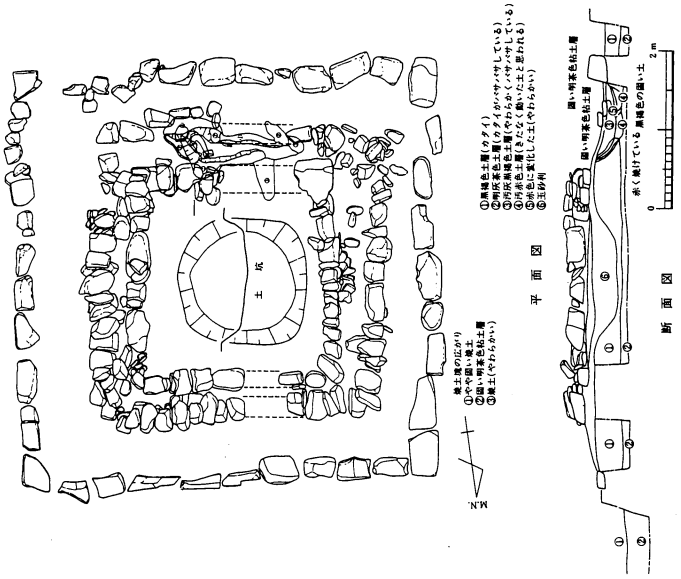
さて，この石積みの基壇全体の構築方法であるが，断面観察により以下述べる工法で築かれている。まず黄褐色土の地山の上に20～30cmの厚さで堆積した黒褐色土を掘り込んで土坑と粘土遺構がつくられる。さらに玉砂利を敷いて平坦面をつくる。その上に前述した石組みを築き，

さらに石を積む。そして最後の緑泥片岩の平石を平坦部に敷く。

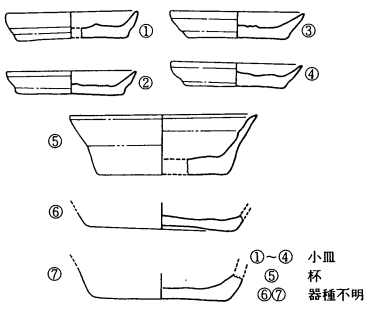
出土した遺物は，土師質土器皿・杯・土鍋のほか輸入磁器など中世の遺物を中心に出土している。

大木塚は，鎌倉時代後期から室町時代にかけて築かれたようであり，保存状態は非常に良好である。本県においては類例が少なく，中世の貴重な遺跡といえよう。

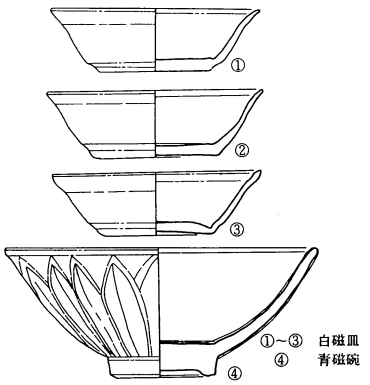
なお，町教委より調査報告書が昭和59年度に刊行される予定である。



第1図　大木塚平面実測図



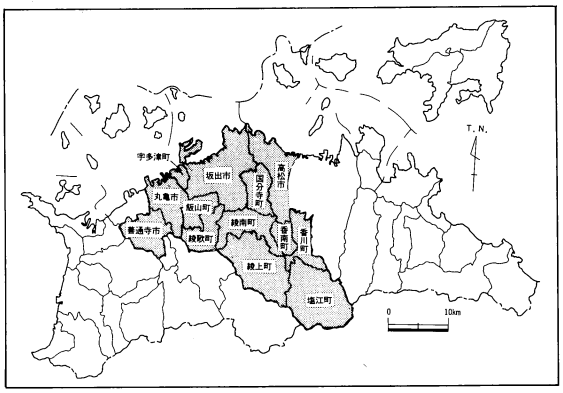
第2図　土師質土器



第3図　輸入磁器

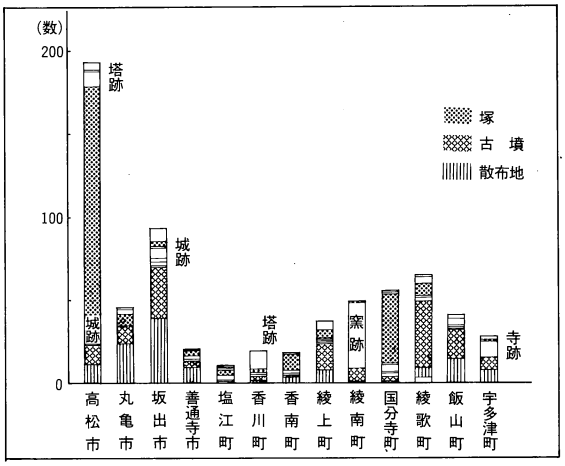
埋蔵文化財詳細分布調査

県教委は，埋蔵文化財詳細分布調査を国庫補助事業として実施した。調査対象地域は中讃地域の高松市・丸亀市・坂出市・善通寺市・塩江町・香川町・香南町・綾上町・綾南町・国分寺町・綾歌町・飯山町・宇多津町（4市9町）で，四国横断自動車道建設（高松・善通寺間）・新空港関連道路網整備などの大規模開発が予想される地域である。



第1図　調査対象地域図

調査は2次に分けて実施した。第1次調査は，各市町単位に委嘱調査員が中心となり遺跡分布地図を作成し，第2次調査での踏査必要地域を選出した。第2次調査は第1次調査をもとに，踏査・ボーリング棒探査・聞き取り調査などを実施した。調査成果として埋蔵文化財包蔵地カード・遺跡地図を作成し埋蔵文化財詳細分布調査概要書を刊行した。



第2図　市町村別新発見遺跡数(種類別)

第1表は各市町別に遺跡数を集計したものである。周知遺跡総数1124に682遺跡が新たに発見された結果，当該地域の遺跡総数は1806遺跡になった。37.7%増という多大な成果を得たことになる。塩江町・高松市・飯山町・丸亀市・宇多津町・香川町・国分寺町の2市5町は倍増以上，綾上町・香南町・綾歌町・坂出市の1市3町はほぼ倍増しているが，綾南町・善通寺市は対象地域平均増加率37.7%を下回る調査結果が出ている。

第2図は，各市町別に新発見遺跡を種類別集計したグラフである。高松市の場合，新発見遺跡の70%が塚である。高松市と同様な傾向を示す市町は国分寺町（75%）・香南町（50%）である。遺跡数増の起因が古墳による町は綾歌町（63%）・綾上町（44%）・飯山町（43%）で，散布地による市町は丸亀市（52%）・善通寺市（47%）・坂出市（43%）である。綾南町の新発見窯跡遺跡は窯跡総数の45%で，新発見遺跡総数の80%を占めている。また宇多津町の新発見寺跡遺跡は10遺跡を数え，新発見遺跡総数の35.7%を占めている。

概報には第1表をもとに種類別・立地別などの視点から分析した結果を掲載しているので参照されたい。

第1表 遺 跡 数 一 覧 表

市 町	貝 塚			住 居 跡			散 布 地			古 墳			寺 跡			古 窯 跡			城 跡			館 跡			祭 跡		
高松市	0	0	0	0	0	0	0	12	12	40	12	52	1	1	2	0	0	0	1	13	14	0	0	0	0	1	1
丸亀市	0	0	0	1	0	11	1	24	25	13	12	25	3	0	3	0	0	0	5	0	5	1	0	1	0	0	0
坂出市	0	0	0	0	0	0	28	39	67	83	31	114	4	1	5	1	3	4	4	6	10	0	1	1	1	0	1
善通寺市	0	0	0	1	0	1	24	10	34	445	3	448	14	0	14	2	1	3	6	0	6	0	0	0	2	0	2
塩江町	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	3	3	0	0	0
香川町	0	0	0	0	0	0	1	1	2	7	3	10	0	1	1	0	0	0	7	1	8	0	0	0	0	0	0
香南町	0	0	0	0	0	0	1	3	4	4	2	6	0	1	1	1	2	3	5	0	5	1	0	1	0	0	0
綾上町	0	0	0	0	0	0	0	8	8	34	16	50	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0
綾南町	0	0	0	2	0	2	2	1	3	83	8	91	4	0	4	48	39	87	5	0	5	0	0	0	1	0	1
国分寺町	0	0	0	0	0	0	4	1	5	6	2	8	3	3	6	0	0	0	3	4	7	1	0	1	2	1	3
綾歌町	0	0	0	1	3	4	10	6	16	39	41	80	2	2	4	1	0	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0
飯山町	0	0	0	0	0	0	0	15	15	17	18	35	1	1	2	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	3	3
宇多津町	1	0	1	0	0	0	0	8	8	4	8	12	8	10	18	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0
計	1	0	1	5	3	8	72	128	200	775	156	931	40	21	61	54	47	101	40	27	67	3	4	7	6	5	11

市 町	塚			塔 跡			郡司庁跡			石 造 物			条 里 跡			墓			その他			総 数			新発見遺跡数(%) 総数
高松市	7	138	145	0	9	9	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	2	0	5	5	49	194	243	79.8
丸亀市	0	6	6	0	3	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	26	46	72	64.0
坂出市	0	3	3	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	8	10	125	94	219	42.9
善通寺市	5	3	8	0	3	3	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	499	21	520	4.0
塩江町	0	3	3	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1	1	2	11	13	84.6
香川町	0	3	3	0	11	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	16	20	36	55.6
香南町	9	10	19	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	22	19	41	46.3
綾上町	3	6	9	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	40	38	78	48.7
綾南町	27	1	28	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	175	49	224	21.4
国分寺町	26	42	68	1	1	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	2	4	1	5	52	56	108	51.9
綾歌町	2	7	9	26	4	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	82	65	147	44.2
飯山町	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	2	19	41	60	68.3
宇多津町	1	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	17	28	45	62.2
計	80	223	303	30	38	68	2	0	2	1	3	4	1	0	1	3	8	11	9	19	28	1,124	682	1,806	37.7

（三枠内数値について，左枠：周知遺跡数，中枠：新発見遺跡数，右枠：合計遺跡数）

櫃石島・大浦浜遺跡の遺物整理報告

―― 弥生時代前期の土器について ――

大浦浜遺跡から出土した弥生時代前期の土器はコンテナ（28 l 入）にして約50箱あり，その整理は昭和57年度から始められ，分布範囲の把握や出土量の算出がなされるとともに，一部遺物について実測図と拓本の作成が行われてきた(注1)。これを受けて今年度は実測図と拓本を継続して作成するとともに，全体的な状況を把握するために基礎的項目について統計処理を行った。

以下，統計処理の結果と整理過程において明らかとなってきた壺の文様に焦点を絞って報告する。尚，統計処理の結果を比較検討するために，中の池遺跡（丸亀市）の統計処理結果(注2)も合わせ図示した。

弥生時代前期の土器は個体数にして215個体相当あり，そのうちの７割弱が甕で，３割を壺が占め，蓋や鉢は若干あるに過ぎない。

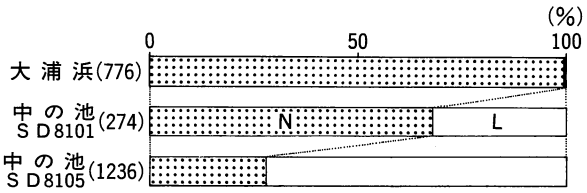
甕は如意状口縁をなすものがほとんどで，逆Ｌ字状口縁をなすものは僅か数点である（第１図)。また，口縁下部に段を有するもの26.2%，無文42.1%，沈線を有するもの31.7%で，沈線の条数は10条ある１点を除いて全て４条以下である（第２図・第３図)。

壺の口頸部についてみると，段を有するものが49.8%と約半分を占め，次いで沈線25.6%，削り出し突帯15.2%，無文8.1%となり，貼り付け突帯を有するものも数点ながら出土している（第４図)。壺の文様は口頸部・頸胴部及び胴上半部に多く施され，平行沈線・連孤文・木の葉文・羽状文・斜格子文・山形文・縦線文・竹管文・刺突文・刻み目など多様な文様が認められるだけでなく，それらの組み合わせによってさらに変化を与えている（第５図)。

以上のような大浦浜遺跡の状況は，極少量ながら前期の後半に属すると考えられる遺物の混入の可能性を含むものの，総じて前期の前半に位置づけられる特徴を示す。このことは弥生時代前期の後半と考えられる中の池遺跡と比較すると明瞭である。特に，段と貼り付け突帯（甕の場合，逆Ｌ字状口縁が相当する）の比率及び壺の文様における著しい変化（中の池遺跡では連孤文や木の葉文や縦線文がほとんどみられなくなり，多条化した沈線と貼り付け突帯が卓越する）に両遺跡を画するメルクマールが求められることは，ここでは触れなかったプロポーションの問題とともに，重要な意味をもつと考えられる。というのは，単にこれらのメルクマールがこの２つの遺跡を画するだけにとどまらず，備讃瀬戸を中心とした弥生時代前期の遺跡の分類にも有効と考えられるからであり，これまでの壺の一要素に着目した型式学的な前期の細分に対して，遺跡の在り方から新たな細分をせまることになろうと思うからである。

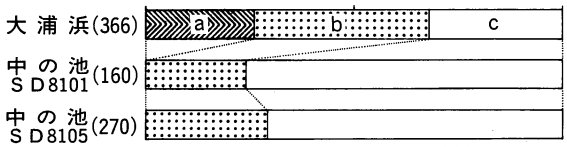
(注) (1) 香川県教育委員会(1981)：「大浦浜遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(IV)』
香川県教育委員会(1982)：「大浦浜遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(V)』

(2) 甕の口縁形態及び沈線条数については下記の文献から引用し，それ以外については新たに作成した。尚，壺の口頸部における削り出し突帯と貼り付け突帯の比率に若干の誤差を含む可能性がある。丸亀市教育委員会（1982)：『中の池遺跡発掘調査概要』



N：如意状口縁　L：逆L字状口縁

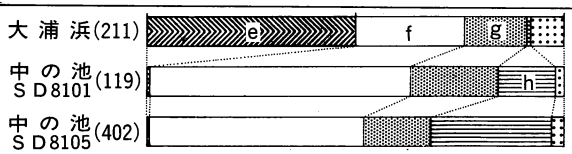
第1図　甕の口縁形態の構成比



a：段　b：無文　c：沈線

第2図　甕における段・無文・沈線の構成比

（如意状口縁の甕のみ対象とする）

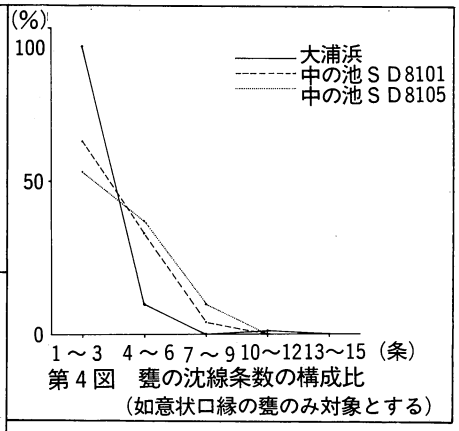


e：段　f：沈線　g：削り出し突帯

h：貼り付け突帯　i：無文

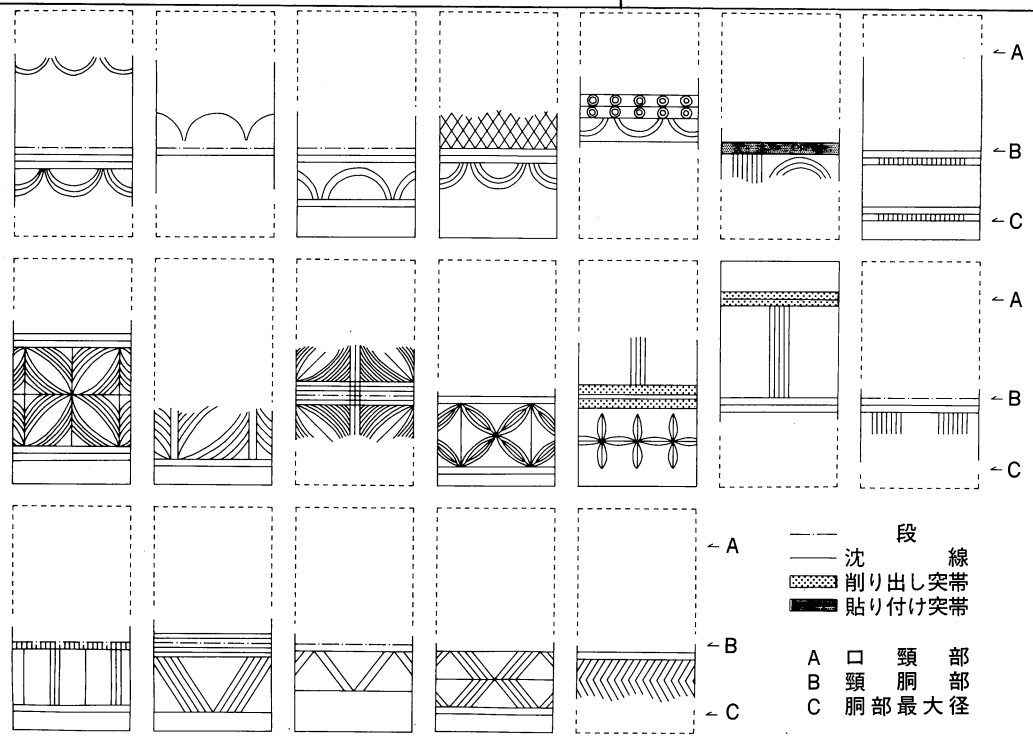
第3図　壺の口頸部における段・沈線・突帯の構成比

（　）内の数字は破片数を示す



第4図　甕の沈線条数の構成比

（如意状口縁の甕のみ対象とする）



第5図　壺　の　文　様　（大浦浜遺跡）

資料紹介　葛谷遺跡出土の弥生土器

所在地　高松市西植田町葛谷

ここに紹介する資料は昭和52年，香川県教育委員会によって発掘調査がおこなわれた葛谷遺跡のG地区出土の弥生土器の一部である。

なお，この資料については香川県文化財保護協会編集の『文化財協会報』第89号（1984年3月15日発行）にも数点を載せているので，併せて目を通されたい。

遺跡は高松市西植田町葛谷に所在し，葛谷川西岸の標高65m前後の地点に立地する。現在，県営鍵面地区農免道路が東西方向に通じているが，道路用地が調査の対象地である。

葛谷遺跡位置図

調査において検出された遺構は弥生時代後期の住居跡と横穴式石室である。前者は半径4mを測り，いわゆるベッド状遺構をもつ。また，炉跡と柱穴が確認できる。一方後者は残存長7m，副葬品に銀環，ガラス玉がみられ，古墳時代後期の遺構である。

さらに全発掘区から出土した弥生土器片と須恵器片は相当な数にのぼる。特に弥生土器が遺物全体に占める割合が高く，遺跡の盛行した時代が弥生時代後期であることが明瞭である。

その他の遺物には，サヌカイト製の石鏃と石庖丁，銅鏃などがあり，別地点における調査（昭和52年7～9月実施）では中世のものとおもわれる遺物をも出土している。

これらの中で今回，整理をおこなったG地区出土の遺物は大部分が弥生土器であり，他の地区と比較しても遺物量が圧倒的に多い。しかも遺跡全体が層位の明確な包含層をもたないことを考えると，以下の資料から遺物全体の傾向を知ることも無理ではなかろう。

出土した弥生土器は壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器・器台形土器の5器種であるが，このうち後2者を除く3器種について，特に口縁部に着目することによって，それぞれの変遷の経過を推測するに至ったため図面を掲げて紹介する。

壺形土器について（第1図）

① 口縁端部（以下は端部と略す）を平たく成形した後，小口状の原体を用いてナデることによって平坦面上に凹線文を施す（1～8）。

② 端部は指でナデるだけの簡単な仕上げであり，凹線文が施文されることはない（9～17）。

③ 端部を細く，丸く仕上げるもの（18）。上記の2形態とは全く系譜の異なる長頸壺である。

甕形土器について（第２～４図）

① 壺形土器の①の製作技法と同様，端部を平たく成形した後，木口状の原体を用いてナデることによって２～３条の凹線文を施す（第２図１～11)。

② 明らかに凹線文を施すことを意図して端部を仕上げているが，３条以上を施文することはなく，細い板状の原体を用いて１条，あるいは小口状の原体で２条程度を弱く施す。したがって凹線文は極めて不明瞭である（第２図12～21)。

③ 指でナデる際の力の強弱により細部の形態は異なるが，指以外の原体は全く用いないものとおもわれる（第３図・第４図１～12)。

高杯形土器について（第５・６図）

① 上記の２器種と同様に端部を平たく成形し，小口状の原体を用いてナデることによって，３～４条の凹線文を施す（第５図１～４)。

② 端部の平坦面の内外への張り出しが少なく，ここに施す凹線文も不明瞭なものが多い。しかしながら，小口状の原体を用いてナデていることは明らかである。(第５図５～９)。

③ 端部はわずかに平たく成形した後，指で弱くナデて仕上げる。したがって凹線文を施すことはない。(第５図10，11)。

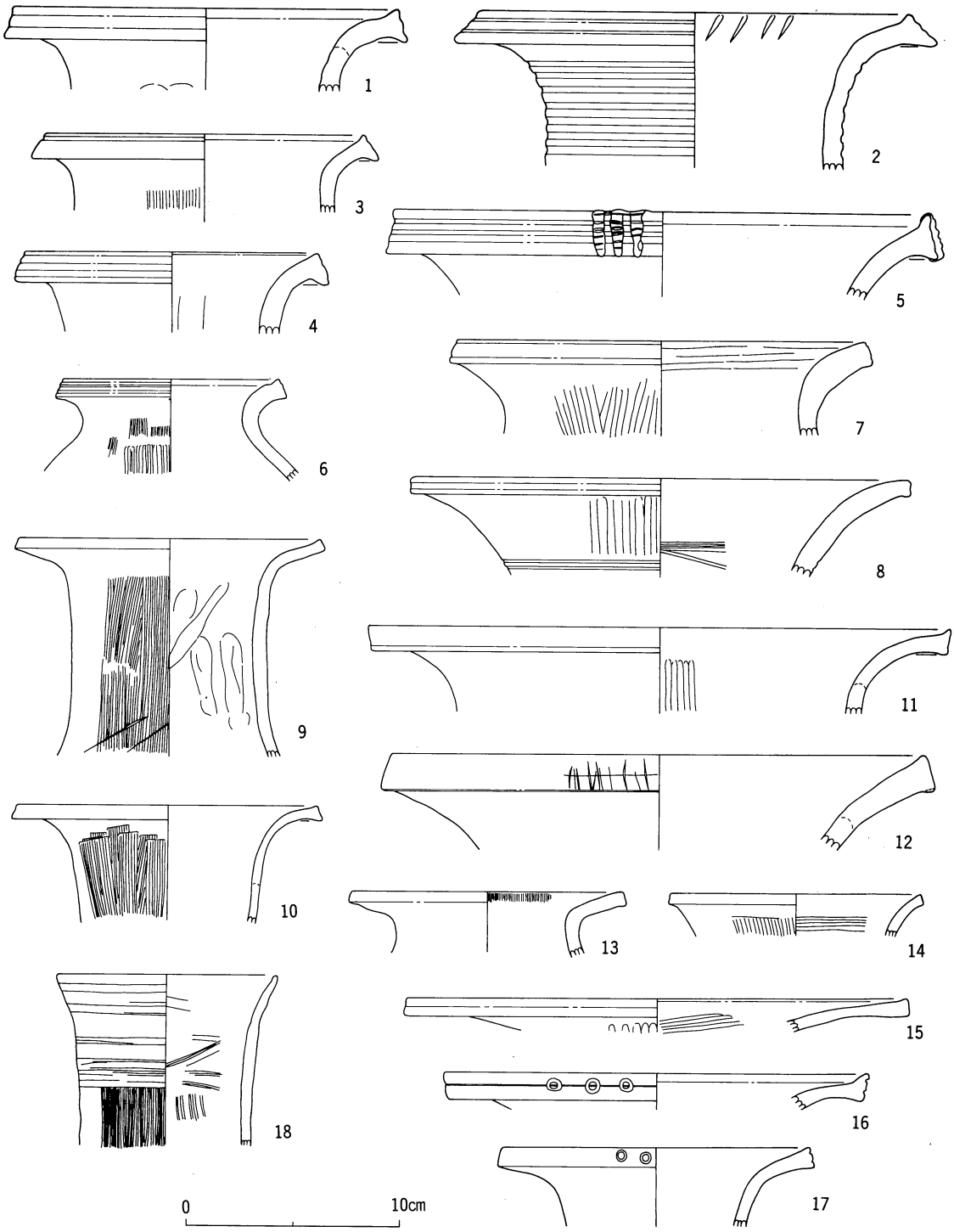
④ 端部は丸く成形する。また内面をナデるために鈍い稜をもつ（第６図１，２)。

⑤ 端部を丸く仕上げる以外は成形と調整がともに簡単である。(第６図３，４)。

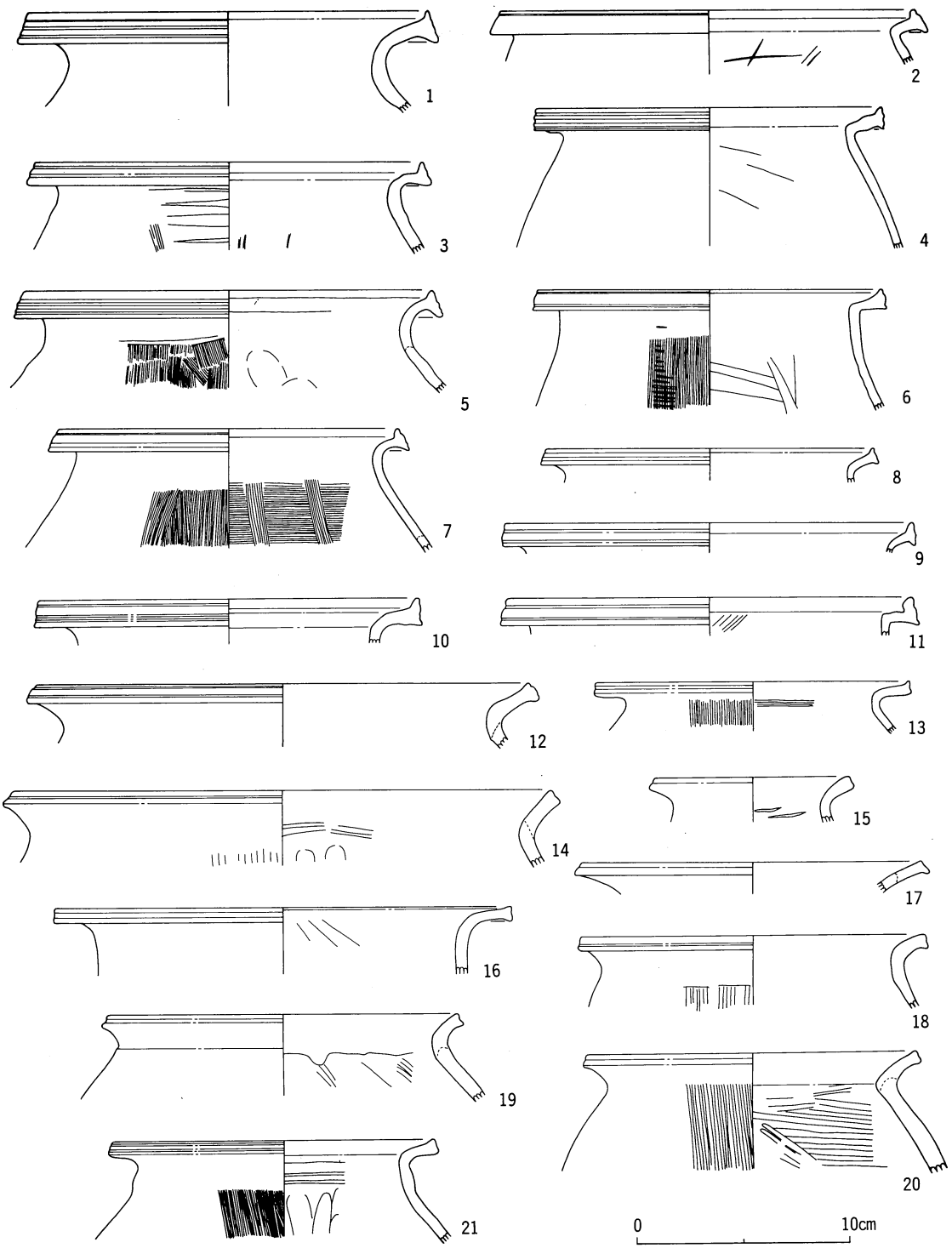
⑥ 成形の技法は⑤と同様であるが，端部を指でナデて仕上げる（第６図５～９)。

以上のように壺形土器，甕形土器，高杯形土器の３器種はそれぞれの細部の形態については様々であるものの，口縁端部の形態の変化，凹線文の普及と衰退の様子などには極めて共通性がある。したがって葛谷遺跡の弥生土器からは中期以来の流行である凹線文が普及し，そして衰退していく様子がうかがえる。

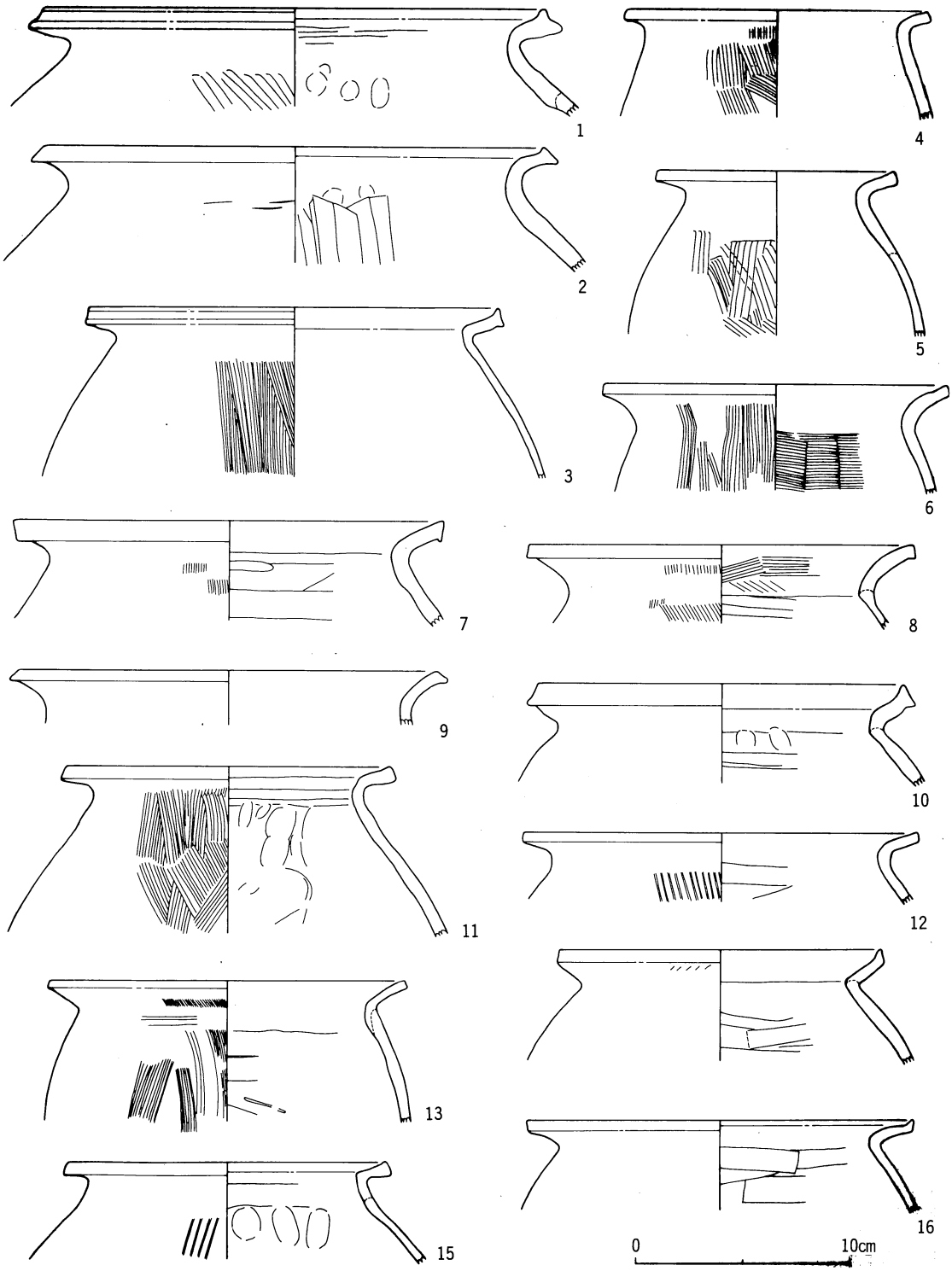
香川県において，弥生時代後期の凹線文の普及する時期の遺跡として知られているものに同じ高松市の大空遺跡がある。そして葛谷遺跡において，凹線文の衰えていく様子が知られることから，葛谷遺跡出土の土器の多くは大空遺跡出土の土器よりも新しく編年することができるのである。ところが葛谷遺跡の資料の次に編年される遺物は現在のところ見出されておらず，わずかに寒川町加藤遺跡の資料のなかに，⑥の技法を用いた高杯形土器がみられることから，あるいは葛谷遺跡よりも新しい様相をもつ可能性もあることを最後に付け加えておきたい。



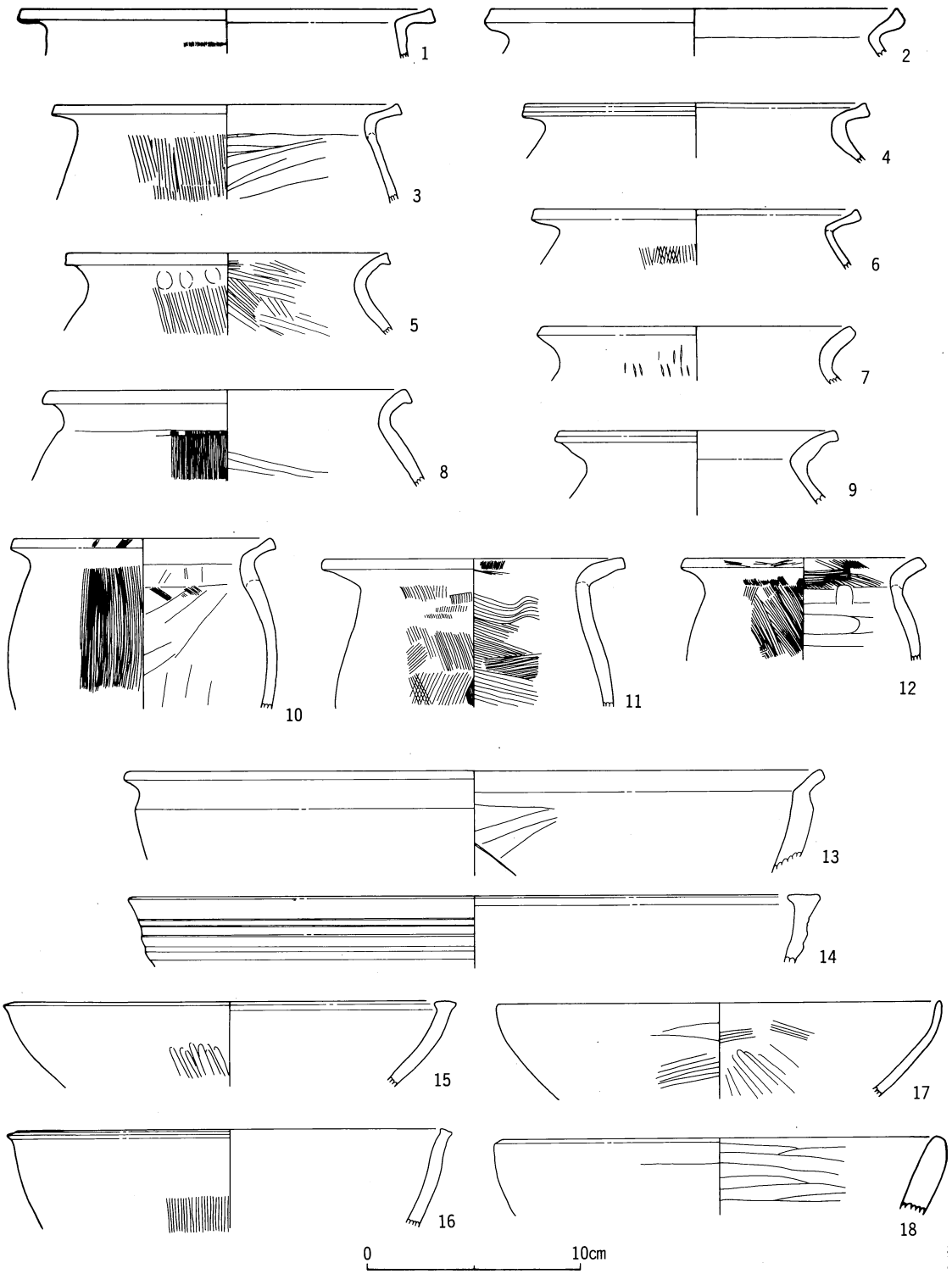
第1図　壺形土器実測図



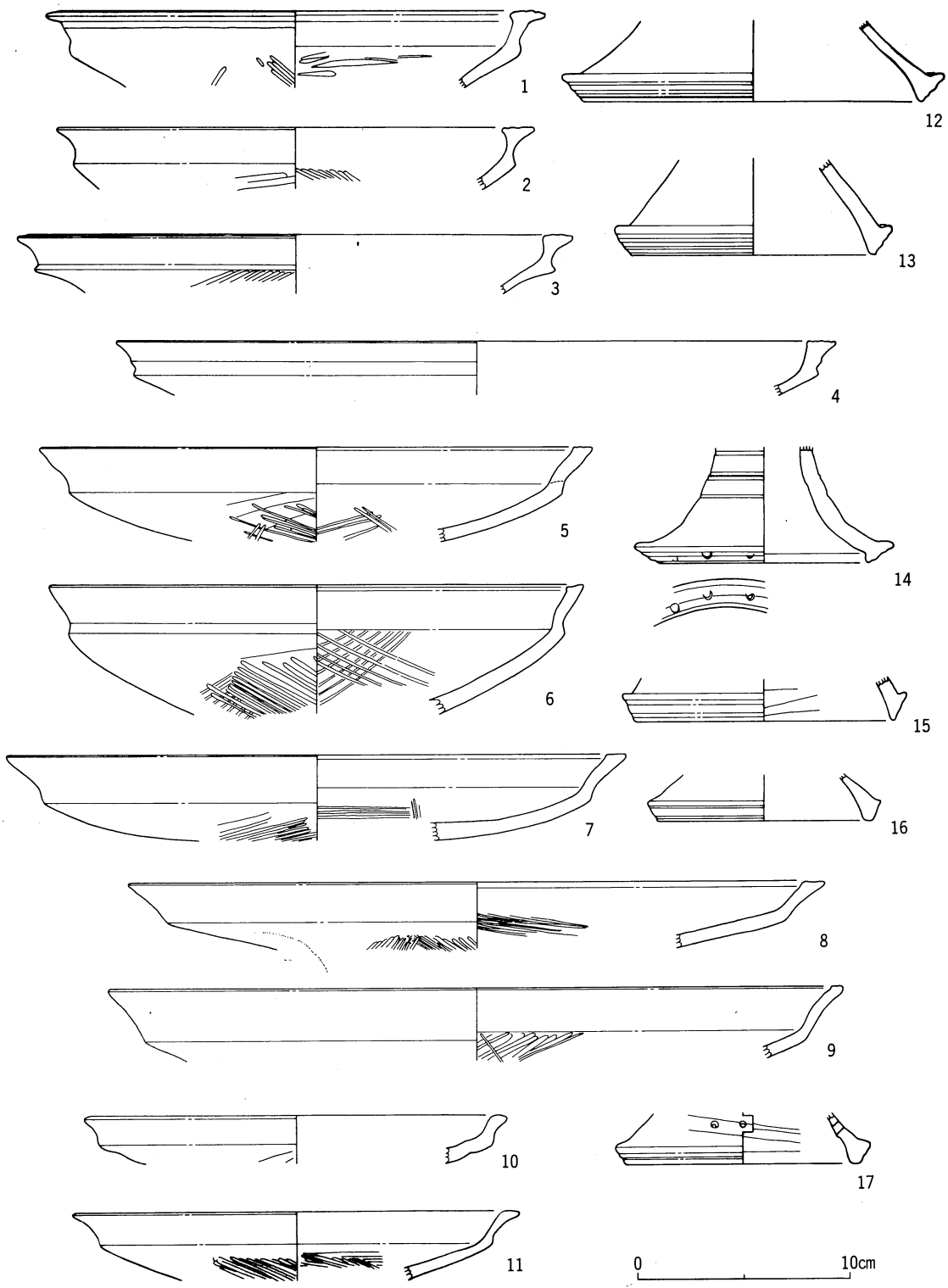
第２図　甕形土器実測図(1)



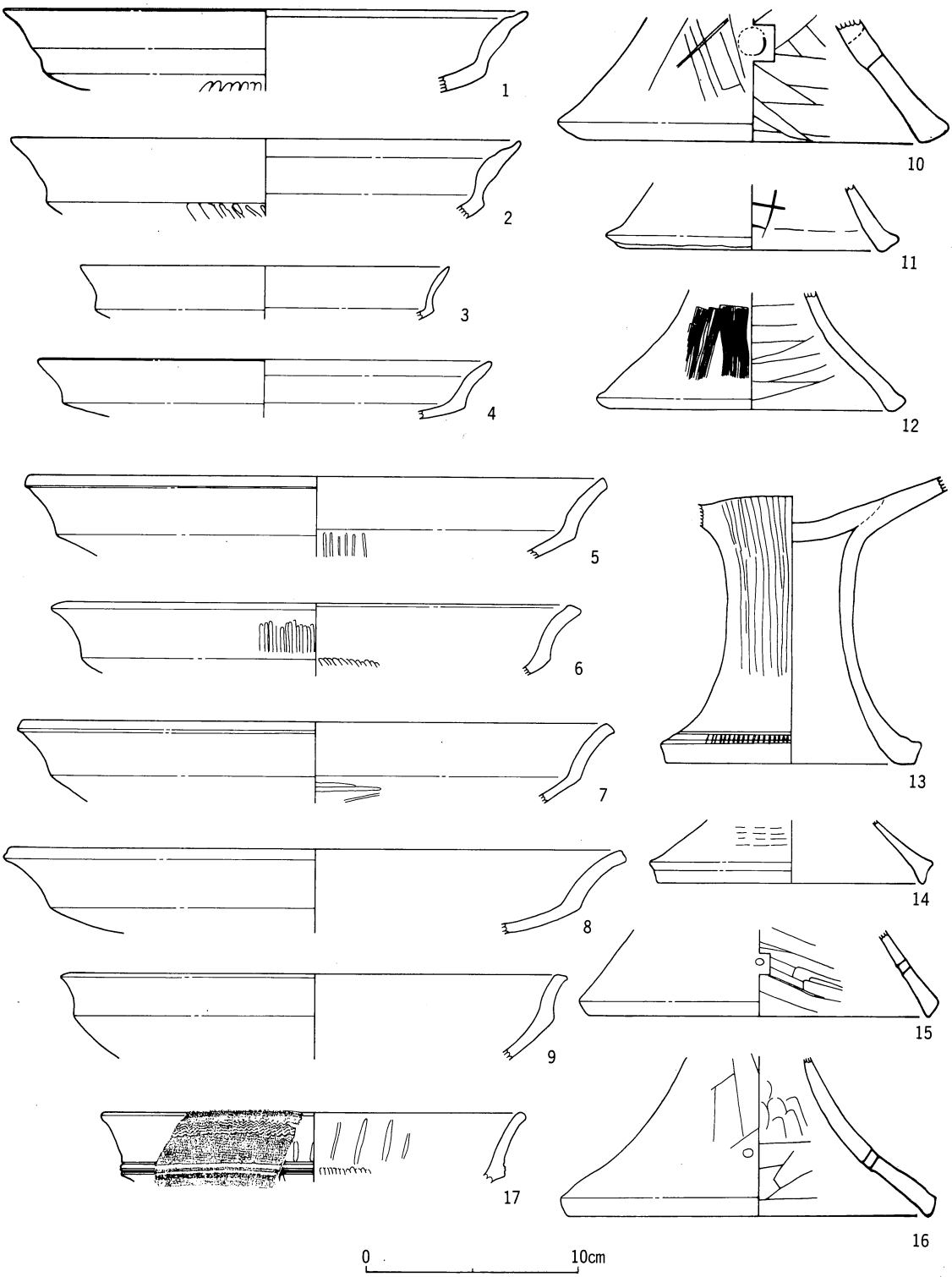
第3図　甕形土器実測図(2)



第4図　甕形土器実測図(3)・鉢形土器実測図



第5図　高杯形土器実測図(1)



第6図　高杯形土器実測図(2)・その他

普及活動　第６回埋蔵文化財発掘調査報告会

昭和53年度にスタートした，この報告会も今年度で第６回を迎えることになった。

今回は「旧寒川郡の古代豪族と文化の発展を探る」というテーマで実施した。これは昭和57年度に東讃地域で，古墳時代から奈良時代にかけての古墳・寺院が６遺跡発掘調査され，それぞれ注目すべき成果をあげたため，それらをまとめる意味でテーマ選定がなされた。

実施に際しては，大川郡内の各町教育委員会ならびに大川郡社会教育振興会の後援を得た。

日時・会場・報告内容は下記のとおりである。

日　　時　　昭和59年２月18日(土)
　　13：30～15：50
会　　場　　寒川町農村環境改善センター
報告内容

テ　ー　マ	発　表　者
最近の発掘調査から	伊　沢　肇　一
弥生時代の寒川	真　鍋　昌　宏
古墳時代の寒川（Ⅰ）	渡　部　明　夫
〃　（II）	東　原　輝　明
東讃の風土と遺跡	秋　山　　忠

当日は小雪の舞う寒い日にもかかわらず，300名を越える参加者を得た。前回，前々回の参加者がそれぞれ100名たらずだったことを思うと，これは埋蔵文化財に対する当地域住民の関心の高さを示すものであろう。加えて後援いただいた各町教育委員会の尽力によるところも大きいものであろう。

さて，今回の報告会が多数の参加者の熱意に答えうるものであったかどうか，発表内容の紹介をかねてふり返ってみることにする。

「最近の発掘調査から」は，東讃と他地域とに分けた上で，時代ごとに最近の調査動向の説明が行なわれた。

この後，東讃地域の弥生・古墳時代の様相が，発掘調査のデータから素描され，最後に「東

讃の風土と歴史」としてまとめられた。

今回のテーマとなった旧寒川郡は，地理的にみて長尾平野とも呼ばれる，東西に細長い平野部とその周辺の丘陵部で，ここの特徴は秋山が指摘したように「南に阿讃山地がせまり，北にもいくつかの山並みが連なって，いわば袋状の盆地をなしている。」のである。この地形的な環境は，東讃地域の歴史を考える場合，留意すべき点であろう。

弥生時代について，真鍋は寒川町の森広遺跡群に焦点をあてて話を進めた。この遺跡は弥生時代のはじめにさかのぼるが，集落が本格的に営まれるのは後期中頃で，その後集落の位置は変わりながらも続き，弥生時代末期で終りをつげることを明らかにした。従来森広遺跡・加藤遺跡・石高内遺跡など調査地区ごとに個別に名付けられていた遺跡を，集落の変遷とみなし，群として把握しようというものである。

次の古墳時代については前期と後期とに二分し，墳墓である古墳を材料にして話が進められた。

前期の様子について渡部は，以前に調査された雨滝山古墳群や昨年度の丸井古墳の内容を紹介し，古墳時代初期にすでに前方後円墳がこの地域で築造されていることを示した。また周辺地域の例として，昨年度発掘調査された高松市鶴尾神社４号墳の内容が報告され，香川県の古墳文化の一つの特徴である積石塚の問題にも触れ，古墳時代前期の東讃地域の様相を述べた。

後期について東原は，最近県内で調査された横穴式石室のデータを丹念に集成し，これをもとに石室平面プラン，規模，出土品を比較検討することで，東讃地域の後期の特色を導き出し，この地域の横穴式石室は比較的小さなものが多いと述べた。

さて，この報告会は，各年度の調査状況や遺跡の概要を広く一般県民に周知するとともに文化財保護精神の啓豪をはかることを目的にしたもので，第１～３回までは遺跡ごとの調査内容の紹介に主眼が置かれていた。

しかしながら，遺跡の個別説明 — 特に発掘の概要 — では一般の人々には専門的になりすぎてわかりづらいのではないかといった反省から，第４回からは時代や地域を設定し，点の説明から，線・面の説明に変化している。

第４回は中世という時代，第５回は丸亀という地域，そして今回は旧寒川群という地域がテーマに選ばれたわけである。

各発表の時間が短いこともあり，各発表者の努力にもかかわらず，「古代豪族と文化の発展」はあまり探れずに終ったように思える。

古代豪族と題目をつけるなら古墳時代に時期を限定し，今までの調査でどういうことがわかり，何がわかっていないかを明確にすべきであったろう。特にわかっていないこと，今後知りたい事を明らかにすることが大切であろう。なぜならば，わからない事が多いから発掘調査をくり返すのであり，発掘調査を行うためには，掘るべき遺跡が保護されていなければならない

からである。

事前の打ち合せを充分に行なうことを次回への課題としておきたい。

文化行政課埋蔵文化財調査担当者名簿（昭和58年度）

課長	遠藤　啓
主幹兼課長補佐	林　茂
副主幹	松本豊胤

〔文化財調査〕

調査一係	主任技師	東原輝明
	技師	安田和文
	〃	松野一博
	〃	西岡達哉
	職員	神明子
調査二係	係長	秋山忠
	主任技師	渡部明夫
	〃	藤好史郎
	技師	小西正行
	〃	真鍋昌宏
	嘱託	安藤一
	〃	坂口淳子
調査三係	係長	伊沢肇一
	主任技師	岸上康久
	〃	廣瀬常雄
	〃	池内右典
	〃	大山真充
	技師	野中寛文
	〃	薦田耕作
	所長嘱託	石塚徳治
	嘱託	河野裕
	〃	片桐孝浩
	〃	中本雅之

〔庶務〕

係長	下河芳樹
主査	加納覚
主事	前田和也
主事	酒井幸子
職員	久保美栄子

香川県埋蔵文化財調査年報
昭和58年度

昭和59年12月
編集
発行　香川県教育委員会
高松市番町4丁目1番10号
電話（0878）31－1111(代)

印刷　有限会社　成光社
高松市郷東町5番地11
電話（0878）82－1476(代)